

42020

教科書文庫

4

810

41-198

200030

2244

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

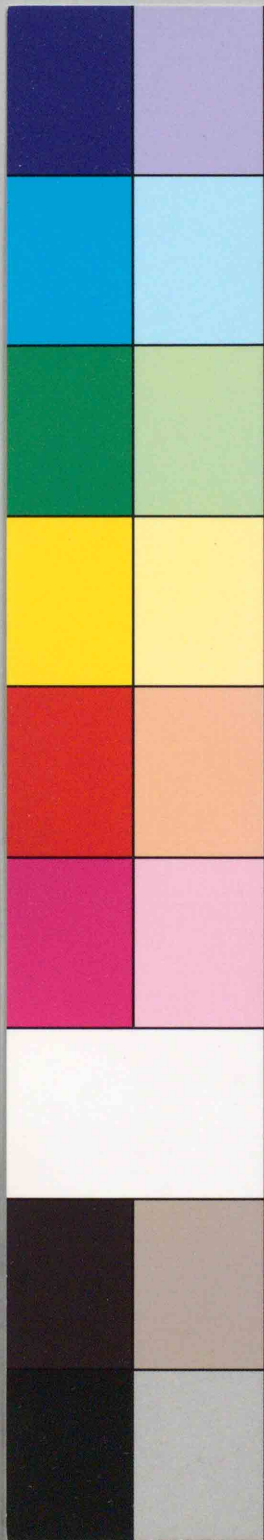
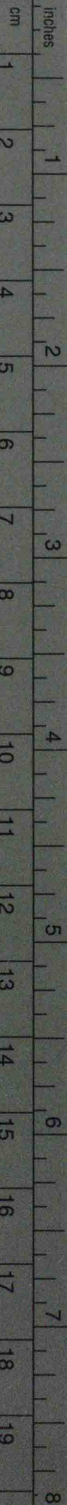


© Kodak, 2007. TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007. TM: Kodak



3759
H019
資料室

大正國語讀本

修正版

卷八

大正七年十二月二十日
教育部省檢定
中學國語教科用

保科孝一編 修正版



大正國語讀本



東京 會社資育英書院發行

大正國語讀本 (修正版) 卷八

目次

- 一 邦人の性格……………姉崎正治…一
- 二 會津落城その一……………柴四郎…六
- 三 會津落城その二…………………………一三
- 四 新古今集の歌(韻文)……………(新古今集)…一八
- 五 歌人西行その一……………藤岡作太郎…二二
- 六 歌人西行その二…………………………二七
- 七 子を法師になして……………吉田兼好…三三
- 八 樺島公禮に與ふる書(候文)……………細井平洲…三七

目次

一

九 柩前の演説……………(シ、I、ザ、I)……………四一

一〇 倫敦塔……………夏目漱石……………五六

一一 漂 泊(韻文)……………伊良子清白……………六一

一二 光頼參内……………(平治物語)……………六四

一三 壇の浦その一……………(源平盛衰記)……………七三

一四 壇の浦その二…………………………七七

一五 討入の光景を報ず(候文)……………榎本其角……………八四

一六 折節のうつりかはり……………吉田兼好……………八七

一七 熊野落……………(太平記)……………九一

一八 寛成親王鷹狩の事……………(吉野拾遺)……………一〇〇

一九 新葉和歌集……………(作文五十講)……………一〇三

二〇 鉢の木その一(謠曲)…………………………一〇九

二一 鉢の木その二…………………………一一〇

二二 與謝蕪村……………藤岡作太郎……………一二五

二三 今様三首(韻文)…………………………一三三

二四 蓋世の雄成吉思汗……………(成吉思汗)……………一三四

二五 希臘の文明……………(文藝思潮論)……………一四三

大正國語讀本(修正版)卷八

一 邦人の性格

姊崎正治

人誰か禍福の變轉に驚き、命運の變化を歎ぜざらん。福祉を得て歡び、不運に接して悲しむは人の常情のみ。然れども運命の怒濤に抗し、毅然として自己の位置を維持する事をなさず、徒に外界の變轉極りなき境遇、運命に翻弄せらるるが如きは自己の天職と能力とを知らざる者にして、自棄の甚だしき之に過ぎたるはなかるべし。人類自ら人生の

一 邦人の性格

一



當に勉むべき最高の究極目的と、又之に達すべき天賦の性能あるあり。拮据此の性能を活動せしめ、自ら立つの氣象なき者は人にあらざるなり。我が日本民族古來感情に富むを以て著し、感情の激する所往々爲し難きの事を爲し、收め難きの功を收めたる事なきに非ず。我が國史の花は一に民族の感情發動に成りし者なり。其の歴史の傳奇的に華麗にして、又美術的に情致あるは此の爲なり。最も感情的に熱血的なる我が民族は、又最も喜怒哀樂の變に富み、怒つては威嚴、十萬の醜虜を退けたる大將軍も、笑つては溫容稚兒をも親昵せしめたり。山なす敵陣を望みて馬蹄の塵と睥睨したる關東の荒武者

も、白面淫齒花の如き平家の公達を殺しては、悲嘆の涙抑へ難く、黒谷の禪房に落飾して一生を念佛に送りしにあらずや。發しては千峰の雲と見まがふ吉野の萬朶の櫻は、實に我が民族の粹なる武士の理想なりき。然れども熱血的感情的なる者は即ち外來の事物に感動し易きなり、運命の轉化に對して最も喜び又悲しみ易きなり。此に於て最も感情に富む我が大和民族は又最も運命に退讓し易き人民たるに至れり。之を最も觀易きの例に見るも、一死君國に盡すの心に至りては我が民族の最も他に向つて誇るべき所。しかも一度意の如くならざらんか、君國の爲には千辛萬苦に耐へ、再舉其の目的を達せんとはせず、

小楠公
楠正行。正平三年(1100)戦死。時に年二十三。

正儀
正行の死後吉野朝に仕へて屢々足利の軍を討つ。一度足利に降服したりとの説あれど確かならず。元中年間病みて卒す。尊氏をして

却つて櫻花の小夜嵐に吹散ると同じく花々しく死して餘塵を止めざらんと勉むるもの、比々皆然るに非ずや。戦一度利あるや、士氣奮躍百戦を苦とせずして敵を鏖にせんとするも、事一度敗るゝや速かに死を決して一軍一族、城を枕にして自盡するを名譽とす。小楠公の四條畷に萬古の恨を残したるも此が爲のみ。鎌倉の故府が遊子をして當年の血痕を懐ひ、古を偲ぶべき幾多の遺蹟を傳ふるもこれが爲に非ずや。吾人は一概に此等武夫の花々しき最後を非難せんとするに非ず。しかも當年若し正行をして弟正儀の如く百難不撓事に當らしめば、南朝の行末は如何なりしかを思ひ、また尊氏をして弟直義に聽かずして徒に自盡せ

云々
九州に於て菊池の大勢に攻められ、失望して自殺せんとす。直義之を諫止す。

しめば、足利氏の天下は如何に終りしかを思はば、感慨轉、深からざるを得ざるものあるなり。熱情的なる大和民族は往々にして運命に翻弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲しみ、受動的に運命の支配を受けて激發するも、活動的に毅然不屈外來の運命に反抗し、之と健闘し以て此の強敵を壓倒せん事を知らず。順境に處しては天神幸を我に降すと謝するも、一度逆境に陥らば、曲神の災厄終に免るべからずと觀じ了らんとす。喜悲轉顛、順逆轉化の間に安立する所なく、隨つて豫言的の大希望を抱きて浮世の波濤に對抗せんとせず、目前の禍福に目眩し、心激し、爲に高大永遠彼岸の光明を望んで勇進猛往するの氣象な

し。これ我が民族性格上の一大缺點に非ずや。此の性格のため、我が國家が幾何の進運を害し、幾何の強度を損するかを思へば、國を憂ふる者の一日も黙視する能はざるところなり。(復活の曙光)

二 會津落城 その一

柴 四 郎

散士は亡國の遺臣。彈雨砲煙の間に起臥し、生を孤城重圍の中に偷み、國破れ、家壞れ、窮厄萬狀辛酸を嘗め盡せり。屈指回顧すれば二十年前、我が國歐米各邦と開港條約を締盟せしに當つてや、尊王攘夷の説紛として起り、慷慨悲歌の士、幕府の專横を憤り、俗吏の偷安を慨し、一死邦に報いむと、臂

井伊大老
名は直弼。
安藤侯
名は信正。
秦檜
支那南宋の奸臣。
韓岳
韓世忠と岳飛との二人、共に南宋の忠臣。

を揮ひて呼號す。恨を幕府に抱くの士、亂を好んで無爲に苦しむの徒、機に乗じて良民を煽動し、公卿を誘惑し、内に深謀遠慮なく、外は宇内の大勢を知らず、徒に螳螂の斧を以て歐米の兵を攘はむと擬す。或は深夜外館を襲ひ、火を放つて剽掠し、或は白日路上不意に起つて無辜の外客を枉殺し、以て匹夫の勇に誇り、以て神州の恥を雪むとなす。兒戲輕佻、怯弱殘暴、言ふに忍びざるものあり。井伊大老は前に斃れ、安藤侯は後に傷き、開港を唱ふる者は人目するに秦檜を以てし、鎖港を云ふ者は自ら韓岳に比す。是に於て外人憤怒し、兵威を以て劫制し、我が海岸に寇し、我が藩籬を亂し、我が國權は彼の殺ぐ所となり、我が威力は彼の凌ぐ所となり、

神州の危殆、命脈の絶えざる一線の千鈞を懸くるが如く、外人の跋扈跳梁、殆ど復制す可からざるに至れり。而して其の原を尋ぬれば、幕府の失體より起れりと雖も、當時慷慨自ら任ぜし士人の、躬親ら招く所のもの亦多きに居る。

我が主君
會津藩主松平
容保。

先帝

孝明天皇。

佐久間象山

名は啓。信州

松代の藩士。

横井小楠

名は存。肥後

熊本の藩士。

輕舉を戒む。然るに内は朝臣等の攘夷論者に黨するあり、外は各國兵威を恃んで約を責むること秋霜よりも嚴なり。而して幕府は三百年昌平の後を受け、政苟且に流れ、兵勢振はず、財政亂れ、大勢已に去り、復挽回すべからざるに至れり。この國家存亡の秋にあたり、豈、毀譽成敗を顧みるに遑あら

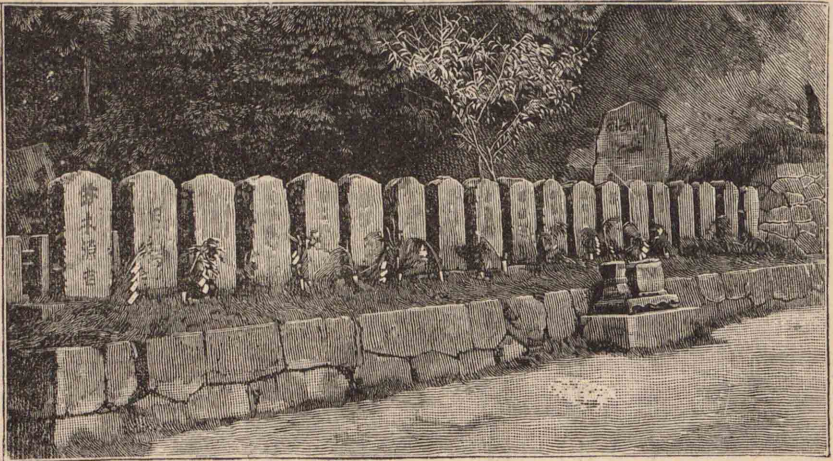
むや。故に我が公決然京師を以て墳墓の地と定め、上は公武の軋轢を調和し、下は内亂の禍機を撲滅せむとし、奮つて之に當るも臂弱くして、負荷の重きに堪へず。且、州人勇あれども謀寡く、剛直にして變通に暗く、孤忠公武の間に介立し、事違ひ、志空しく、徒に天下の憫笑する所となる、聞くに勝ふ可けむや。

大樹
十四代將軍家
茂。

偶、先帝崩御し、大樹亦繼いで薨ず。將軍慶喜公、英才を以て國歩の艱難に當り、侯伯と舊怨を解き、弊政を除き、國權を復し、以て大いに爲す所あらむと欲す。然れども病膏肓に入り、復之を如何ともする能はず。遂に大政を奉還せられ、尋で我が公亦職を失ひ、京師を退くに至れり。而して當時世

人卻つて我を責むるに覇府を保庇して、維新の帝業を妨ぐるを以てし、朝廷我を罪するに禍心を包藏して帝命に抗するを以てす。哀願途絶え愁訴計究り、錦旗東征、大軍我が境を壓す。

時に一二兇奸の輩あり、我が家財を掠め、我が婦女を殘し、降人を屠戮して、殆ど王師民を弔するの意を失ふが如し。是に於て我が君臣皆以爲らく、これ一二雄藩の陽に幼主を擁して、陰に私怨を報ずるのみと。闔國捍禦、春より秋に至る。孤軍百戰、刀折れ、矢盡き、敵兵遂に城下に迫る。我が將士枕藉死するもの麻の如く、瘡者空拳を揮つて敵兵に抗し、手斷ち、足碎けて地に斃るれども、目を瞋らし、齒を切して敵兵の



白虎隊の墓

進路を遮り、頭足處を異にし、血流れて杵を漂はすに至るも、猶敵に抗するの狀を爲さざるものなし。當時年少の一隊あり、白虎隊と云ふ。年約十六七、皆良家の子弟なり。此の日初めて陣に臨み、驕勝の兵と戦ひ、衆寡敵せず、死傷略盡く。餘す所僅かに十六人、奔つて一丘に上り、瘡を裹み、血を歎つて

伏波 馬援の事。馬援は後漢の光武帝に仕へて伏波將軍となる。
後漢書馬援傳に「男兒要當死二子邊野一以二馬革一裹屍還葬上耳。何能臥二床上在二兒女子手中二耶」

憩ふ。少焉ありて城市、火四に起り、砲丸櫓樓を焚く。皆以爲らく、城陥り大事去れりと。乃ち西向再拜して曰く、「今や刀折れ、弦絶し、臣等が事終る。苟も生を偷んで以て君に背かず」と相訣別し、刃を引いて自殺す。眞に憐む可きなり。然れども大丈夫尸を馬革に裹むは伏波の壯語、亦壯士の常のみ、何ぞ之を嗟かむや。唯酸鼻心を刺し、目見るに忍びず、耳聞くに堪へざるものは、婦女の操烈、國家と共に亡ぶる者舉げて數ふ可からざりしことなり。今にして其の慘狀を懷へば、茫として夢の如く、恍として幻の若く、覺えず涙下るなり。

三 會津落城 その二

其の年 明治元年。
 勝軍山 會津城の東七里に在りて、要害の地なり。

其の年八月二十二日、勝軍山の敗報到る。士民呼んで曰く、「敵軍飛來城下に迫る」と。時に散士三兄一弟あり。慈母小弟を一僕に託し、涙を揮つて遠く去らしむ。けだし深意の存する有り。大兄は軍を監して越の後州に戦ひ、轉戦して城下に傷き、仲兄は野州に戦歿し、小兄は兵を督して境上に拒ぐ。家翁疲兵を勵まして郭門に戦つて傷き、叔父、亦客兵を督し、瘡痍を裹みて尙激戦す。曉雨濛々、日色光なく、砲聲轟々、叫聲大に震ふ。散士時になほ幼なり。一矢を敵に放つて死せむと欲し、跪いて家人に訣別し、覺えず顔色悽愴たり。慈母叱して曰く、「汝幼なりと雖も武門の子なり。能く

一敵將を斬りて潔く尸を戰場に暴し、家名を損すること勿れ。」と。散士奮つて蹶起す。家人送つて門に至る。祖母呼んで曰く、「努力せよ。」と。乃ち涙を掩ふ。嗚呼痛ましいかな、百年の恩情、永訣、言茲に盡きぬ。

家人神前に聚まり、香を焼きて祖先の靈に告げて曰く、「事已に此に至る、亦言ふべきなし。苟も餘生を亂離の間に偷まじ。潔く國家に殉じて死し、父兄をして後顧の累を絶たしめ、以て三百年來養成せし士風を表明する、眞に此の時に存す。唯恨むらくは、我が公多年の孤忠、空しく水泡に屬し、反賊の臭名を負ふを。是終天の憾、海枯れ、山覆るも消し難し。」と。妹、時に五歳なり。慈母謂つて曰く、「敵兵已に我が家に

迫る。今汝と泉下に赴き、以て父兄を待たむとす。聞く、地下途暗しと、今我が一族皆亡ぶ、人の又香火を供するなし。汝相抱持して其の途に迷離する勿れ。」と。火を放つて從容義に就けり。噫、悲しいかな。

かくて孤軍益々重圍の中に陥り、硝焰空を覆うて日光なく、風雪膚を刺して糧餉已に盡き、士卒日に傷亡して外に援兵なく、孤城を以て天下の大軍に抗する三旬、遂に降旗を建つ。この役や、婦女の竊かに軍に従ひ死傷するもの多し。一婦あり、其の良人・父兄と皆戦歿するを聞き、手づから老母と、一子とを刃し、辭世一首を詠じて曰く、

識るや人まもるにたへて家も身も

焼くやほのほの赤きころを

と、火を放つて自殺す。一姫あり、一藩降ると聞き、憂憤指を
嚙んで壁上に血書して曰く、

○ 君王城上建降旗。妾在深宮何得知。

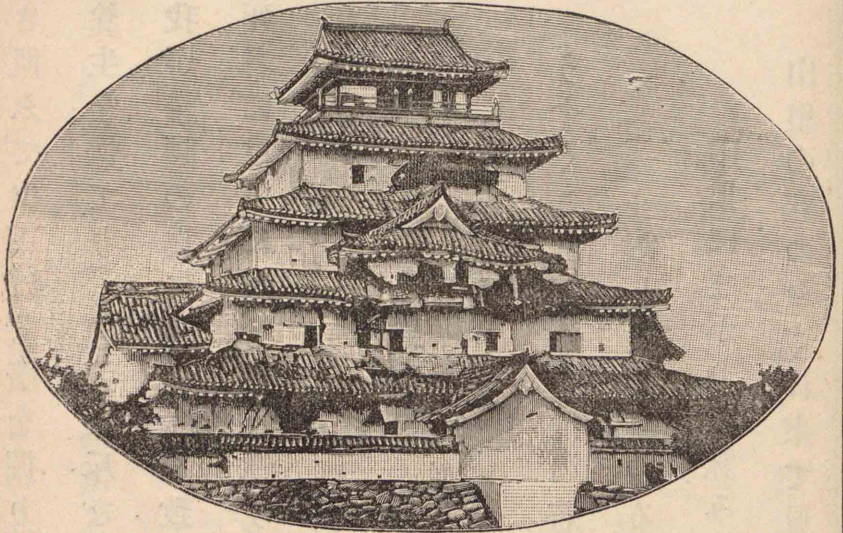
と、宮前の松樹に縊る。又一婦あり、月明に乘じ、笄を以て國
歌を城中の白壁に刻して曰く、

明日よりは何處の人か眺むらむ

なれし大城にのこる月かげ

と、髪を薙つて死者の冥福を祈れり。士卒も憤恚自殺する
ものあり。

主將諭して曰く、「空しく死して名を滅せむよりは、恥を忍び、



鶴ヶ城 天主閣

生を全うして、一旦外患ある
の日誓つて神州の爲に生命
を鋒鏑に委し、而して是非正
邪を死後に定めむには若か
ず」と。こゝに於て一藩恨を
忍び涙を呑み、轅門に降る。
我が公は檻車、京に送られ、將
士は東西に虜となり、幽囚數
歳、俗吏に罵られ、獄卒に辱し
められ、後又極北の荒野に放
謫せられ、悲風蕭殺、牧馬夜嘶

き、飢ゑて山下に蕨薇を掘り、窮して海濱に海藻を拾ひ、以て餘生を保てり。 迺遭竄斥、なほ悔いざる所以のものは、他日我が帝國の爲に、鞠躬命を致し、往年の志を天下後世に伸べ死者に泉下に謝せむと欲するのみ。 (佳人の奇遇)

四 新古今集の歌

宮内卿

後鳥羽天皇の官女。

千五百番歌合に春の歌

宮内卿

うすくこき野邊の緑の若草に

あとまで見ゆる雪のむら消え

山里にまかりて詠み侍りける 能因法師

山里の春の夕ぐれ来て見れば

能因法師
俗名橋永僧。諸兄十世の孫。

皇太后宮大

夫俊成

姓は藤原。後白河院の勅を奉じて千載集を撰す。

いりあひの鐘に花ぞ散りける

百首歌奉りし時

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山ぶきの

はなの露そふ井出の玉川

攝政太政大臣家百首歌合に春曙と

いふ心を詠み侍りける 藤原家隆

かすみたつ末の松山ほのぼのと

なみにはなる、横雲のそら

夏の月をよめる 從四位賴政

庭のおもはまだかわかぬに夕立の

空さりげなくすめる月かな

從四位賴政

源賴政の事。以仁王を奉じて平家討伐を企て敗れて平等院に自刃す。

正三位季能
姓は藤原。

千五百番歌合に
小夜千鳥聲こそ近く鳴海潟

正三位季能

かたぶく月に汐や満つらむ

僧正遍昭
俗名良峰宗
貞。仁明天皇
に仕ふ。

題知らず

僧正遍昭

すゑの露もとの雫や世の中の

おくれさきだつためしなるらむ

藤原定家
俊成の子。家
隆等と共に後
鳥羽上皇の勅
によりて新古今
集を撰す。

攝政太政大臣家歌合に羈中晩風といふ

藤原定家朝臣

ことを詠める

いづくにか今宵はやどをかり衣
日も夕ぐれの嶺のあらしに

藤原高光

題知らず

藤原高光

村上帝に仕
ふ。

見てもまたまたもみまくのほしかりし

花のさかりは過ぎやしつらむ

和歌所歌合關路秋風と言ふことを

攝政太政大臣

人すまぬ不破の關屋の板びさし

あれにし後はたゞ秋の風

寂蓮法師
俗名藤原定
長。俊成の甥。

眺望のこゝろを

寂蓮法師

和歌の浦を松の葉ごしに詠むれば

こずゑによするあまの釣舟

鴨の社の歌合とて人々詠み侍り

けるに月を

鴨長明

石川やせみの小河のきよければ

月もながれを尋ねてぞすむ

五 歌人西行 その一

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず、近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは、抑、何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫

山家集
西行の歌集。

鳥羽殿

京都の南方鳥羽村にありし御殿。白河天皇山莊として作り給ひ、後に鳥羽上皇の仙洞御所となる。

なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門のほとりに人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死したまへり。とて、若き妻、老いたる母の、重り伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入

保延六年
崇徳天皇の御
代。(1092)

右幕下
右近衛大將源
頼朝。
大師
弘法大師。

無爲。は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて、とりすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つはじめぞと、顧みもせて家を遁れ出で、嗟峨に至りて剃髮せりと。かくて名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさになんざりきといふ。

西行既に世を遁れ高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一蓋の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東

高尾

山城國高尾山
神護寺。
文覺は當時神
護寺の住持た
り。

西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立てて、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸

り去りしかば「日頃の仰に違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面様か、文覺をこそ打たんずるものをなれ」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

願はくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

建久元年
後鳥羽天皇の御代。(一八五)

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

宗祇

足利時代の連歌の名人。

應仁

足利將軍義政の時。

元祿

徳川五代將軍綱吉の時。

(一三七—一三六)

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。

西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのゝ、その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅

六 歌人西行 その二

藤岡作太郎

行がいかにかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。そもく、平安朝の貴紳・淑女は、鴨・桂・二川の流域數里の閒を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、従うて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外は知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花・言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想・辭句の上にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せ

崇徳院
保元の亂の結
果、讃岐に遷
され給ふ。

る時、西行ひとり蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の閒に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところ萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠ぜることの、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、また宜ならずや。西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して之を視ること猶己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

にまた我が住みうくてうかれなば

松はひとりにならむとすらむ

同情は進んで愛著となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子

を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ

月よ。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來む秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

愛著は迷なり、この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず、これを以て窓前日夜の友とす、清淡虚無一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ今日もくらさむ

雲にたゞ今宵の月をまかせてむ

厭ふとしてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。

そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せむ

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易、率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。(國文學全史)

七 子を法師になして

吉田 兼好

ある者、子を法師になして、學問して、因果の理をも知り、説經などして世渡るたづきともせよ。といひければ、教のまゝに説經師にならん爲にまづ馬に乗習ひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなむは、心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらむに、法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業、やうくさかひに入りければ、いよく能くしたく覺えて、嗜みけるほどに、説經習ふべき隙なくて年よりにけり。

此の法師のみにもあらず。世閒の人なべて此の事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて、月日を送れば、ことごとに成す事なくして、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども、取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。されば一生のうちむねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひ捨て、一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、

あまたのことの來らむ中に、少しも、益のまさらむ事を營みて、其の外をば打捨て、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨て、十の石に就く事はやすし。十を捨て、十一に就く事は難し。一つなりとも優らむ方へこそ就くべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。此をも捨てず、かれをも取らむと思ふ心に、彼をも得ず、これをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて、東山に用ありて、すでに行きつきたり

渡の邊の聖
攝津の國渡邊
(今の大阪の
地)に住める

とも、西山に行きて、其の益まさるべき事を思ひ得たらば、門より還りて西山へ行くべきなり。こゝまで來著きぬれば、此の事をばまづいひてむ。日をさゝぬ事なれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひたゞめと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。之を恐るべし。一事をかならず成さむと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず、人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、ある者、ますほのすゝき、ますほのすゝきなどいふことあり。渡の邊の聖、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師、其の座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、蓑笠やある。

僧なるべし。
名不詳。

登蓮法師

歌に巧なる僧
にて勅撰中に
此の人の歌多
く載せらる。

敏さ時は云々
論語陽貨篇
に、「恭則不
侮、寬則得衆、
信則人任焉、
敏則有功、惠
則足以使
人。」

かし給へ。彼の薄の事ならひに、渡の邊の聖のがり尋ねまからむ。」といひけるを、餘りにもものさわがし。雨やみてこそ。」と人のいひければ、無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖も失せなば、尋ね聞きてむや。」とて、走り出でてゆきつゝ、習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたうおぼゆれ。「敏きときは則ち功あり。」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。此のすゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。(徒然草)

八 樺島公禮に與ふる書

細井平洲

米澤今侯
上杉治廣。

老侯
鷹山侯上杉治
憲。

愚老去る八月廿五日、東都發足致候。此行は偏に米澤^{*}今侯の老侯への御孝心より事起り候。久々御談申さず、老侯常常遙念止まれざるに付、今侯そこを甚だ御勞念有之候て、急度市谷へ御願達有之候に付、市谷にても其孝心を感心被致候故、乍大儀下向候様に、と、細々被申含候。元來生涯に今一度老侯へ面謁致度本心、下悞にも相叶ひ候に付、七十の老を忘れて、百里の旅行も存じ立ち候事に候。刀根川以東驛々にて、逆旅の主人往々有志の者も御座候て、米澤聖君の御師匠様と申唱へ、逢ひに罷出し者も、宵に參り、又朝に參り、夜を込めて途中迄禮服にて送り候者も有之候。之にて米澤侯の德、隣國に布き申候様子ども感心致候。十一日振にて、九

月五日に南境板谷關に至り候處、國校の督學神保行簡、前日より命を以て勞ひ申候。其餘吏人も多く被差出置候。翌六日に嶺を下り、府城より三里、大澤と申す驛に至り候處、老侯親しく郊迎の沙汰相聞え候に付、急ぎ候て八つ過に羽黒堂と申す處に著き候。最早侯の儀衛遙に相見え候に付、五六町轎を下り歩み申候處、普門院と申す寺の門前に、兩傍に雲從俯伏し、侯は路の中に立ち被相待候。進んで拜し申候處、愚情は地に手して拜し度存念に候へども、侯の態度は左候はゞ之も地に手して御答拜可有之様子故に、無是非足跗に手して拜し申候。先づ何の言もなく、老淚滿眼に御座候。老侯も淚滿面にて、先生御安泰と許りにて、御案内申すべし

とて寺門に被入候。外門より中門迄足指仰ぎ申候三町許りの阪に御座候。聯歩にして進み被申候。中々一步も前行は無之候。杖を進められ候へども、辭して杖せず候處もしや躓きも致すべきかとの心遣と相見え、手を引かぬ許りに比肩して被進候。堂に參り候節、御案内と被申候て、階を上り、堂板に俯伏して被待候。夫より坐に上り候時、是は例の御存知の通り、辭讓久しく候て、漸く御對坐に相成り、徐々言端も出て候て、互に言語に及び申候。杯進じ候て、例の通り進らせ申候て、獻酬も相濟み候。國老菴戸六郎兵衛は今侯の命を以て、同じくこゝ迄郊迎、勿論儀を整へ候て、禮容親切に候。偕駿河守、其外諸公子よりも、名代の使者皆禮服に

て是迄罷出候。今日近傍の村民、老少となく田畔に伏して儀を觀申候者、嗚呼の聲許りにて皆々落涙、飲泣の聲啾々と聞え候。侯の徳民心に感戴の處は是にて相知れ申候。

九 柩前の演説

諸君よ、羅馬人諸君よ。親友よ、國人諸君よ。暫く御靜聽を煩はしたい。自分が此處へ參つたのは、シーザーの葬儀行はんが爲で、彼を稱讚せんが爲ではない。人の行つた悪事は其の死後までも残るが、善事は往々にして其の骨と共に埋没します。シーザーの如きもまた然うあらしめたはうがよろしい。ブルータスは、シーザーは野心を抱いたと

Brutus

Caesar

申された。果して然らば、それは甚だ痛ましい過失であつて、シーザーは甚だ痛ましい應報を蒙つたのである。こゝにブルータスをはじめ其の他の人々の許可を得て——蓋しブルータスは公明正大の人であり、又其の他の人々も悉く公明正大の人々でありますから——許可を得て、こゝにシーザーを葬るの辭を演べるのであります。彼は自分の親友であつた、自分に對しては忠實な、公平な友であつた。が、ブルータスは、彼は野心を抱いてゐたと言はれる、而してブルータスは、公明正大の人である。シーザーは嘗て夥多の捕虜を羅馬へ伴ひ還つた、其の償金は悉く國庫に收められた。此のシーザーの行爲が野心家らしく見えましたが

Lupercal

らうか。嘗て貧民が飢餓に叫ぶのを聞いてシーザーは涕を流した。野心は今少し峻酷な素質の者でなければならん。けれども、ブルータスは、彼は野心を抱いたと言はれる、而してブルータスは公明正大の人である。諸君は何れも御覽になつたであらう、リユ^{*}ーパアカルの祭日に於て、自分は三度まで王冠をシーザーに呈した、それを彼は三度迄辭した。あれが野心でありませうか。けれどもブルータスは野心を抱いたと言はれる、而して確かにブルータスは公明正大の人である。自分は決してブルータスの言つたことを駁撃しようとするのではない、唯知つてゐる限りの事實を申すのである。諸君は何れも嘗てシーザーを愛して

をられた。それには理由が無かつた譯ではない。然らば、如何なる理由で諸君は彼を哀悼することを差控へられまする。お、判断力。理非を判ずる分別力は、今は獸類などの有に歸して、人間は理性を失つてしまつたのか。御免下さい。予の精神はシーザーと一緒に此の柩の中に入つてしまつてゐる。それが戻つて来る迄は物が言はれません。つひ昨日まではシーザーの一言は全世界に匹敵することもあるであつた。今や彼は此處に横たはり、如何なる卑しき匹夫と雖も、彼に尊敬の意を致さうとはしない。お諸君よ、若し自分がかかりにも諸君を煽動して憤激せしめ、反抗の念を起さしめるやうであると、是取りも直さずブル

ータスを傷け、カシヤスを傷けることゝなるが、あの人達は、諸君御存じの通り、公明正大の人々である。自分は彼の人人を傷けることを欲しない。自分はあのやうな公明正大な人々を傷けるよりは、寧ろ世に亡き者を傷け、自分を傷け、諸君を傷けた方が當然と思ふ。併しながら此處にシーザーの捺印を経た一葉の書面がある。自分は之をシーザーの納戸内に於て発見しました、すなはち彼の遺言狀である。若し平民諸君をして、唯一寸此の遺言狀の主旨を聴かしめたならば——御免なさい、無論自分は讀みはしませんが——若し聴かしめたならば、諸君はシーザーの死骸に驅寄つて其の傷口に接吻し、其の神聖な鮮血に各自の手巾を浸すど

ころでなく、其の頭髮一筋をも後の記念にと争ひ求めて、其の身死なんとする間際には遺言中にそれを記入し、永く子孫に譲り傳ふべき寶物ともせらるゝであらう。

まあ、お鎮りなさい。遺言狀を讀んではなりません。

シーザーが深く諸君を愛してゐた事を諸君が知らるゝのは宜しくない。諸君は木でも石でもなく、人間である。既に人間である以上は、シーザーの遺言狀を聽かれたならば、必ずや深く感激して狂者の如くにもならるゝであらう。諸君はシーザーの財産の相續人ぢやなどといふ事は知られんがよろしい。若しそれを知られたなら、おゝ！どんな事になるやら圖られない。

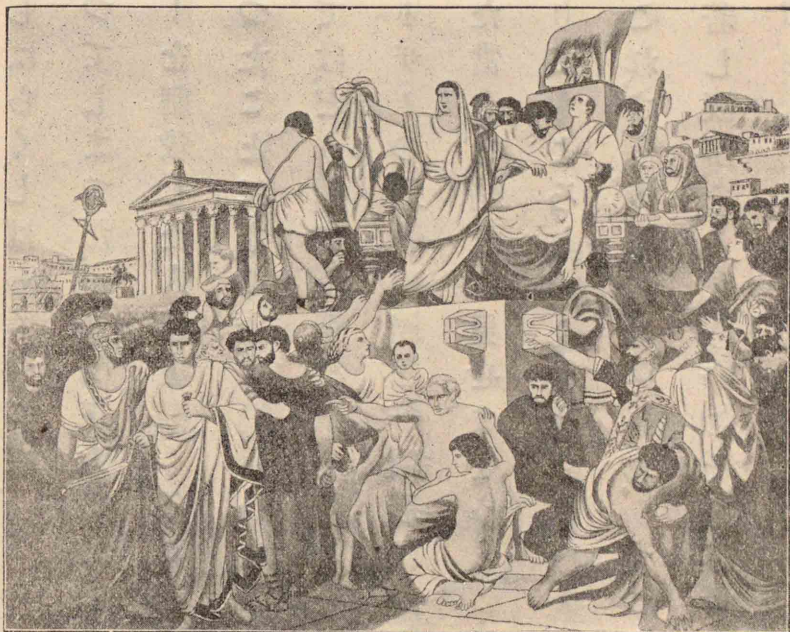
しばらく、しばらく待つて下さい。あゝ、つひうつかり口走つてしまつた。公明正大の目的の爲に短劍を以てシーザーを刺殺した人達を傷くることにならねばよいが、あゝ、困つたことになつた。

では、どうしても遺言狀を讀めと言はれますか？ では、シーザーの遺骸の周圍へ環形におんななさい、遺言狀を製した當人を諸君に見せませう……壇を降りませうか！ 下りてもよろしいんですか？

これ、さう押してはいかん。ずつと離れて下さい。諸君に若し涙があるなら、今こそながす準備をなさい。諸君はいづれも此の外套を御存じてあらう。私はシーザーがはじ

Nervii

Casca



ア - ト - の 演 説

めて之を著用した日
 を覚えてゐる。
 それは或夏の夕方、勁
 敵^{*}ネルワイイ族を征
 伐して大勝利を得た
 其の日に陣中で被た
 のであつた。御覽な
 さい、これ此處をカシ
 ヤスの短劍が刺貫い
 たのだ。御覽なさい、
 奸賊^{*}カスカメがどん

なに斫つたか！此處をば子のやうに愛せられてゐたブル
 ータスが突通したのだ。すなはち彼が其の惡むべき刃を
 抜取つた其の途端に、御覽なさい、シーザーの鮮血が其の後
 を追つて、さながら人が戸口から走り出るやうに流れ出た
 のを。今無慚な叩き方をしたのは、よもやブルータスでは
 あるまいかと、見定めんとしたかのやうに。何故なれば、ブ
 ルータスは諸君も御存じの通り、シーザーの守神同様であ
 つたからです。如何に深くシーザーが彼を愛してゐたか
 は、おゝ神々よ、あなたがたが御承知のことだ……これこそ
 最も殘忍無慈悲な切口であつたのだ。流石の大シーザー
 もブルータスが自己を刺すを見ては、謀反人の力よりも遙

Pompey

かにおそろしい彼が恩知らずの振舞を見ては、流石の大勇氣も打ちくぢかれ、おのが外套で面を掩うてポンペイの像の脚下にすらも、大シーザーは倒れたのだ、血汐は泉とながる、間に。

おゝ！國人よ、同胞よ。シーザーが倒れたのは國が倒れたのも同様です。それと同時に自分も、諸君も、吾々ことごとくが倒れたのだ。而して殘忍無慚の叛逆人等は倒れた吾々を眼下に見下して凱歌を奏し勝誇つた。おゝ！今こそ諸君は泣く。して見るとさすがに惻隱の感に堪へられんと見える。あゝ其の涙こそは恩を知り義を知る涙だ。やあ、諸君。これは只シーザーの外套に傷が附いたに過ぎな

い。然るに諸君は之を見てさへもお泣きなさるか？さ、これを御覽なさい。これが本人です。これ此のとほり謀反人どもに切りさいなまれた本人です。お待ちなさい、お待ちなさい。

深切なる諸君、親友諸君よ。自分の申したことが原因となつて、諸君が然う妄りに唐突に暴舉に及ばれるやうなことがあつてはなりません。此の度の事を行つた人達は何れも公明正大な人々であります。如何なる私怨私憤があつて、嗚呼！かやうな事を敢てせられたか、それは自分の知る所でない。ともかくも彼等は賢明でもあり、また公明正大でもあるから、無論諸君に對して道理らしい辯解をせらる

るであらう。親友諸君よ、自分は諸君の心を盗まうとして来たのではない。自分はブルータスのやうな雄辯家でない。否諸君の豫て御存じの通りの質樸な、木訥な、只友を愛するだけの男である。それをまた彼等が知つてをればこそシーザーの爲に公に演説することをも許したのである。無論自分は才智もなければ文字もなく、徳もなく、身振、手眞似も下手なれば表白法も知らず、辯舌も拙く、逆も人の血を攪亂するやうな力は無い。私は只眞直に辯じ得るのみである。

諸君の知つてをらるゝ事實其の儘を諸君に話して、懐かしいシーザーの傷口を、哀な無慚な物を言ひ得ない口を諸君

に見せて、私が其の口に代つて語つたまでである。が若し私がブルータスでブルータスが私であつたならば、必ずや諸君の心を攪亂して、羅馬街頭の石をすらも奮起せしめ、忽ち暴動を起さすやうな雄辯を、シーザーの一つ一つの傷口から發せしめたでもあらうものを。

市民甲「暴動を起さう。」

市民乙「ブルータスの家を焼いてくれう。」

市民丙「ぢやあ出掛ける——さあ、徒黨の奴等を搜し出せ。」

まあお聞きなさい、諸君。まあ私の言ふことをお聞きなさい。

君がたは理由をよう承知しないで事をしようとしてをら

Drachma
古代のギリ
シヤの銀貨
の名。州と
時により
て其の價を
異にす。

Tiber

れる。シーザーは何故にそれほどまでに諸君に愛慕せられるべきであるか、御存じか？あゝ諸君は御存じない。然らばそれを改めてお話しせねばならん。諸君は先刻申した遺言状の事をお忘れなすつたのだ。これがシーザーの捺印を経た遺言状です。シーザーは羅馬市民各自へ、一人々々へ、七十五^{*}ドラクマを與へます。靜かにして聽いて下さい。尙其の上に彼は自分の遊歩地を悉く諸君に譲りました。即ち彼の私有に屬する各處の涼亭をはじめ、近頃新に樹木を植附けさせたタイバア河の此方岸の各處の庭園をば諸君及び諸君の子孫に、永久に譲り渡して、諸君をして其處で

享樂せしめ自由に逍遙せしめ、疲勞を慰めしめんことを望んでゐる。シーザーは斯ういふ人であつた。何時又斯くの如き人が來るであらうか？
市民甲「もう決して來ん、もう決して——さあ、齋場へ往つて遺骸を火葬にして、それから其の燃えさしを炬にして謀反人共の家を焼かう。死骸を持上げる、死體を。」
市民乙「さ、火を取つて來い、火を。」
市民丙「腰掛をぶつ倒せ。」
市民丁「長床几をぶつ倒せ、窓を毀せ、何もかも叩き毀せ。」
死體を携へて市民等皆入る。
(坪内逍遙譯「シーザー」)

一〇 倫敦塔

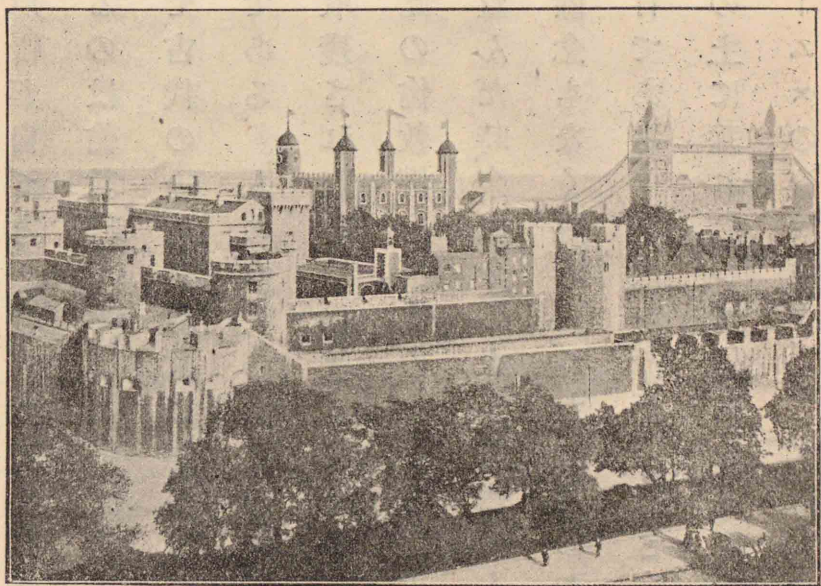
夏目漱石

「來るに來所なく、去るに去所を知らず。」といふと禪語めくが、余はどの路を通つて塔に着したか、又如何なる町を横ぎつて吾が家に歸つたか、未だに判然しない、どう考へても思ひ出せぬ。唯塔を見物しただけは慥かである。塔其の物の光景は今でもありくと眼に浮べる事が出来る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。唯前を失し後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稻妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の様だ。倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる

Thames

戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するのは倫敦塔である。凡てを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬車、汽車の中に取殘されたるは倫敦塔である。

此の倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、將、古の人かと思ふまで我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら物靜かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして、低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いて居る



倫 敦 塔

かと思はれる。帆懸舟
 が一隻塔の下を行く。
 風なき河に帆を操るの
 だから、不規則な三角形
 の白い翼が、何時までも
 同じ所に停つて居る様
 である。傳馬の大きい
 のが二艘上つて来る。
 唯一人の船頭が艫に立
 つて艫を漕ぐ。是も殆
 ど動かない。塔橋の欄

干のあたりには白き影がちら／＼する、大方鷗であらう。
 見渡した處凡ての物が静かである、物憂げに見える、眠つて
 居る、皆過去の感じである。さうして其の中に冷然と二十
 世紀を輕蔑する様に立つて居るのが倫敦塔である。汽車
 も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らん限りは我のみは斯く
 あるべしと云はぬばかりに立つて居る。其の偉大なるに
 は今更の様に驚かれた。
 此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前の
 みで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地域である。ならば
 聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形狀はある
 が、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へん

Sepia

と誓へるが如く見える。
 余はまだ眺めて居る。セピア^{*}色の水分を以て飽和したる
 空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦
 が吾が心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が
 幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して来る。朝起
 きて啜る澁茶に立つ湯氣の、寢足らぬ夢の尾を曳く様に感
 ぜられる。暫くすると向岸から長い手を出して余を引張
 るかと怪しまれて來た。今まで佇立して身動もしなかつ
 た余は、急に川を渡つて塔に行き度くなつた。長い手は尙
 尙強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。
 長い手はぐいぐい引く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔

門まで馳せつけた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁
 石は、現世に浮遊する此の小鐵屑を吸収して了つた。(森虛集)

一一 漂泊 伊良子清白

一 一 漂泊
 蓆戸に秋風吹いて

河ぞひの旅籠屋さびし

あはれなる旅の男は

夕ぐれの空を眺めて

いと低く歌ひはじめぬ

亡き母はをとめとなりて

白き額月にあらはれ

亡き父はをぐなとなりて

まろき肩銀河を渡る

柳洩る夜の河白く

河こえて煙の小野に

かすかなる笛の音ありて

旅人の胸に觸れたり

故郷の谷間の歌は

續きつゝ断えつゝ悲し

大空のこだまの音と

地の底のうめきの聲と

まじはりて調べは深し

旅人に母はやどりぬ

若人に父はくだれり

小野の笛煙のをちに

かすかなる節は残れり

旅人は謠ひつづけぬ

みどり子の昔にかへり

ほゝゑみてうたひつゝあり (孔雀船)

一二 光頼參内

十二月十九日平治元年。(八七)勸修寺左衛門督光頼藤原氏。時に年三十六。信頼藤原忠隆の子にして光頼の甥に當る。時に、年二十七。

内裏には、十二月十九日、公卿僉議とて催されたり。勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは、信頼卿の舉動過分なり。とて、不參におはしましけるが、參内して、承らむ。とて、ことに、あざやかに、束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀を、おとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雑色の装束に出立たせ、自然の事もあらば、人手に懸くな。汝が手に懸けて、光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その外、清げなる雑色、四五人召具して、大軍陣を張りて處々を固め、守護しける

長方藤原氏。時に年二十。母方の舅云頼顯 光頼 惟方 女(忠隆の室) 信頼

を事ともせず、前、高らかに追はせて、入り給へば、兵共も、大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上、藤達みな、下にぞ著かれたる。光頼卿こは不思議の事かな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものと思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へ。と色代して、しづと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿のためには、母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になり

衛府督
右衛門督信賴
を指す。

て、色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、
光賴卿、下重の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、今日は
衛府督が一座すと見えて候ふ。召に參ぜざらむ者をば、死
罪に行はるべしと承りて參内する所なり。抑、何事の御諛
ぞ。と問はれけれども、信賴卿物も宣はず。著座の公卿も一
言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て、
つい立ちて、悪しう參つて候ひけり。とて、しづくくと歩み出
でられけり。
庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿
は大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひ
つれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざ

賴光

源滿仲の長
子。圓融、華山

一條、三條、後
一條の五朝に

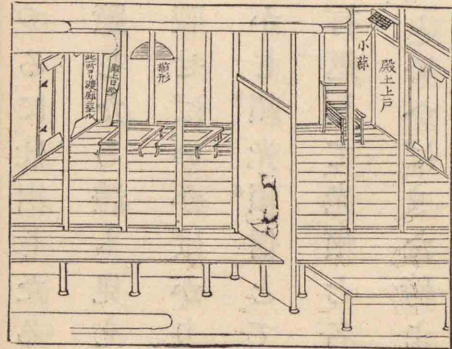
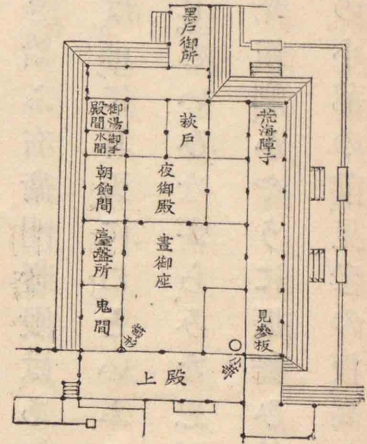
賴信

賴光の弟。一
條、三條、後一

條、後朱雀の
四朝に歴仕
す。

りつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝか
も臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として
合戦せば、いかばかりかたのもしからむ。と申せば、傍なる者、
「むかし賴光、賴信とて、源氏の名將おはしましき。その賴光
を打返して、光賴と名告り給へば、これも剛にましますぞか
し。」といへば、また傍より、なぞ、その賴信を打返して、信賴と附
き給ふ右衛門督殿は、あれほどの臆病におはします。といへ
ば、壁に耳、天に口といふことあり、おそろし、おそろし。聞か
じ。といひながら、みな忍び笑に笑ひけり。
光賴卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上
の小菰の前、見參の板、高らかに踏鳴して立たれたりけるが、

別當惟方
檢非違使別當
たり。時に、
年三十五。



清涼殿平面圖

殿上の間

荒海の障子の北、菖の戸の邊に弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議として催されつる間、参じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當時の有職、然るべき人共なり。その内に入らむこと、甚だ面目なるべし。さても、先日、右衛門督が車

少納言入道
藤原信西。
神樂岡
山城國愛宕
郡。京都の西
北郊外。

勸修寺内大臣
藤原高藤。
三條右大臣
高藤の子定
方。

の尻に乗りて、少納言入道が首實驗の爲に、神樂岡へ向はれしことは如何。以ての外、然るべからざる舉動かな。近衛大將、檢非違使別當は、他にことなる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實驗は、甚だ穩便ならず。とのたまへば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて、赤面せられけり。

光頼卿、重ねて、こは、如何に勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代。承り行ふ事は、みなこれ徳政なり。一度も悪事に

英雄
英雄家の略。
公卿の家格の
名にして清華
とも稱し、攝
家に次ぐ。

熊野參詣

此の時清盛は
宿願ありとて
重盛と共に熊
野參詣に立ち
し其の途中に
ありき。

切目の宿よ
り云々

切目は紀州日
高郡にある
村。此處に切
目の王子と云
ふ社あり。清
盛は十二月四
日立、十日
切目に宿して

從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有
道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に
至るまで、人にさしもどかるゝほどの事はなかりしに、御邊
始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと
口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目
の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待受
けて、大勢にてぞあんなる。信賴卿がかたらふ所、若干なら
じ。平家の大勢、押寄せて攻めむには、時刻をや廻らすべき。
もし、また、火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給
ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべ
し。如何にいはむや君臣ともに、自然の事もあらば、天下の

六波羅の急報
に接す。

主上

二條天皇。

上皇

後白河上皇。

珍事王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大
小事を申し合すところ聞ゆれ。相構へて、相構へて、隙を窺
ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主
上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本
御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劔璽は何處に。」「夜のお
とどに。」と、左衛門督、次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へ
られける。また、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のし
つるは何者ぞ、と宣へば、それには、右衛門督住み給へば、その
方さまの女房などぞ影ろひ候ふらむと申されければ、光賴
卿聞きもあへず、世の中は、今はかくござんなれ。主上の渡
らせ給ふべき朝餉には、信賴住み、君をば黒戸の御所に遷し

許由
支那の堯帝の
時の人。堯の
天下を譲らんとするを辭し俗事を聞き耳汚れたりとして之を潁水に洗ふ。

參らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は、王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國には、かやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。とて、のろくしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむとすさまじげに立ちにけり。光頼卿、且は悲しくて、われ如何なる宿業によりて、かゝる世にうまれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由^{*}にあらねども、今の内裏の有様を聞かむ輩は、耳をも目をも、洗ひぬべくこそ侍れ。とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御

事を悲しみて、打萎れてぞ出て給ひける。 (平治物語)

一三 壇の浦その一

さるほどに、源氏の兵ども、いとど力を得て、平家の船に漕寄せ漕寄せ亂れ乗る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横散散に攻む。水手、かんどり、櫓を棄て楫を捨て、船を直すに及ばず、射伏せられ、切伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は女院^{*}、二位殿などの乗り給へる御船に參られたりければ、女房たち、こはいかになり侍りぬるぞ。と宣ひければ、今はともかくも申すに言葉足らず。かねておもひ設けたることなり。とてうちわらひたまふ。手づから船の掃除

中納言
平知盛。
女院
建禮門院徳子。高倉天皇の中宮にして安徳天皇の御母。
二位殿
清盛の後室平時子。

をして、見ぐるしきものども、海に取り入れ、こゝ拭へ、かしこ
拂へ。」などのたまふ。「さほどの事になりはべりけるか。
あなあさまし、あなあさまし」とて女房たち、聲々をめき叫び
たまふ。

二位殿は今、はかざりと見はて給ひにければ、練色の二衣ひ
きまとひ、白袴のそば高く挟みて、先帝を抱き奉り、帯にて、わ
が身を結びあはせ参らせ、寶劔を腰にさし、神璽を脇に挟み
て、ふなばたに臨み給ふ。先帝は八つにならせ給ひけり。
御年のほどよりはねびとゝのほらせ給ひて、御形あてにう
つくしく、御髪黒くふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、
たぐひなくぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色に

先帝
安徳天皇。

て「こはいづこへ行くべきぞ。」と仰せられけるこそ悲しけれ。
二位殿は「兵どもが御船に矢を参らせ候へば、別の御船へ行
幸なし参らせ候。」とて、

いまぞ知るみもすそ河の流には
浪のしたにもみやこありとは

と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じくつづき
て入りたまひにけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、先帝
の御乳母帥典侍、大納言典侍以下の女房たち、船の艫舳に臥
しまろび聲をとゝのへて、叫び給ふもおびただし。浮きや
上らせ給ふとしばしは見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、
深く沈みて見え給はず。昔は一天の主として、殿をば、長生

殿をば長生
云々
慶滋保胤が、
天子萬年の詩
に、「長生殿裏
春秋富、不老
門前日月長。」

と祝ひ、門をば、不老と名づけしかども、今は雲上の龍下りて、忽ちに、海中の鱗となり給ふこそ悲しけれ。あはれなるかな、花に喩へし十善の御粧、無常の風に匂を失ひ、悲しいかな、月に輝きし萬乗の玉體、蒼海の浪に影を沈めおはすこと。無常もとよりさだめなし、有待誰かはたのみあるなれども、清涼・紫宸の玉の臺を振捨て、鬪戦・兵革の船中に行幸して、いまだ十歳にだにも満じ給はぬ御齡に、忽ちに、波の底に入り給ひけむ、あはれといふもおろかなり。

女院は後れ奉らじと、御焼石と御硯の箱とを、左右の御袂にやどし入れ、御身を重くしてつづきて、海に入らせたまひけるを、渡邊源次兵衛番が子に源五馬允昵が郎等、熊手を下し

て、御髪をから巻き、御船に引入れ奉る。彌生の末のことなれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。翡翠の御髪よりはじめて、皆しほたれおはしますぞ御いたはしき。昵は、もしやの時とて、鎧唐櫃の底にもたりける、唐綾の白小袖一襲取出して、女院に参らせたりけるは、夷なれどもなさけあり。昵は近くは参り寄らず、程を隔て畏りて、君は、女院にてわたらせおはするか。と度々たづね申しければ、御覽じなれぬ夷のありさま、おそろしく思し召しけれども、御ことばをば出させ給はず、二度うちうなづかせ給ひけり。

一四 壇の浦その二

忠盛	清盛
重盛	維盛
宗盛	資盛
知盛	清經
重衡	知章
德子	
經盛	經正
敦盛	通盛
教盛	教盛
頼盛	
忠度	

源氏の郎等に、後藤三範綱は、平家の船に乗入りて、弓をば捨て、打物抜いて走り回りけるを、越中次郎盛嗣寄せあはせ、組んで重り、上になり下になり、船中を五ころび、六ころびしければ、互に刀を抜く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、悪七兵衛景清、範綱をば刺してけり。前能登守教経は、元來心剛に身健かにして、進むことありて退くことなし。軍敗れぬと見えければ、思ひ切り、死生知らず振舞ふ。これぞ聞ゆる能登守とて、われ先にと争ひて、かゝりけれども、少しも、面も振らず戦ふ。矢頃に廻る者をば、さしつめさしつめ射けるに、更にあだ矢なし。近づくものをば引寄せ、提げて海へ投入れければ、面を向け難し。

九郎冠者

判官と云ふも同じ。義經の事、官檢非違使の尉なりければ判官といふ。

太政入道
平清盛。

前新中納言知盛卿これを見て、よしなき事し給ふものかな。このともがらは、皆歩兵アヒヤウにこそ侍りぬれ、あながちに、目に立て給ふべきにあらず。自害をもし給へかし。と宣へば、さては、九郎冠者に組めとこそ。それは、存ずるところなり。いかかはせむと伺ひ回るところに、判官の船と、能登守の船と、すりあはせて通りけり。能登守、然るべしとて判官の船に乗移り、兜をば脱ぎすて、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、軽々と身をしたゝめて、いづれ九郎ならむと馳せめぐる。判官かねて存知して、とかく違つて組まじ、組まじと紛れ行く。さすが大將軍と覺えて、鎧に小長刀突いて、武者一人あり。能登守、目をかけて、軍將義經と見るは僻目か。故太政

入道の弟、門脇中納言教盛の二男に、能登守教經」と名告り、にこと笑ひて飛びかゝる。判官は組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやすらひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもが立て隔て、立て隔てしけれども、除け、やつばら。ものものし」とて、海の中へ踏入れ取入れつと寄る。既に組まむとしければ、判官、早業、人にすぐれたり。小長刀を脇に挟み、さしくゝりたる、弓だけ二つばかりなる鄰の船へ、つと飛移り長刀取直して、船端に、にこと笑ひて立ちたりけり。能登守は力なくして船に留り、あゝ飛びたり、飛びたり」とほむ。その後、能登守、今をかぎり、と狂ひ回りければ、面を向け難し。こゝに安藝太郎時家といふものあり。阿波國の住人安藝

大領といふ者の子なり。三十人の力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく、三十人づゝ力あり。時家、二人の郎等に、いひけるは、吾等三人、心を一つにして、組まむには、鬼神といへども負くまじ。能登殿強しといふとも、やは、三人には勝ち給ふべき。三人取つてあはすれば、九十人が力なり。私の力業は、人の證據に立たず。能登守に組んで、ちからをも、人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふはいかに」といへば、郎等ども、仔細にや及ぶべき」とて、三人一度に鍔を傾け打つてかゝる。能登守は、源氏の郎等に、名もあり、力もあればこそ、教經にはかゝるらめ。これぞ軍の最後なると思ひければ、しづくと相待つところに、三人鼻をならべ、隙間もなく

つと寄る。一人をば海中へたうと蹴入れ、二人をば左右の脇にかい挟んで、一しめしめて、いざおのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。とて、海の底へぞ沈みける。前平中納言教盛、同新中納言知盛は、一所におはしけるが、伊賀平内左衛門を召されて、いかに家長。見るべき事は見つ。先帝をはじめ參らせて、一門の人々自害し海に入りぬ。今までも、かくあればつれなき命を惜しむに似たり。大臣殿は、いかになり給ひぬるやらむ。と問ひ給ふ。家長涙を流して、大臣殿、右衛門督殿二人は、一度に海に入り給ひたりつるを、敵熊手にかけて奉りて、二所ながら引上げ、捕り參らせ候ひぬ。と申しければ、知盛卿、あな心う、など深くは沈み給はざり

大臣殿

内大臣平宗盛。

右衛門督殿

宗盛の長子清宗。

けるぞ。と、二度のたまひて涙をはらくと流して、今は、何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束はいかに。と仰せられければ、今さら、君に離れ奉りて、いつちへ行くべきに候はず。御伴なり。と申せば、知盛卿、世にうれしげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱捨て、西にむかひ、念佛申して、兩人自害せられければ、有國家家長以下、侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。「あはれ、この人に世を譲りたらば、たとひ運のきはみなりとも、都にて、いかにもなり給ひなまし。」と惜しまぬものはなかりけり。赤旗赤符、海上に充ち満ちて、紅葉を風に吹散したるが如し。海水も、血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。主

蜀江の云々
白氏六帖に、
「蜀成都有二瀨
錦之江云
云。」

を失へる船は、風に随ひ、潮に引かれて、越路の雁の、行を亂るが如く、膚を離れたる衣は、水に浮き、波にあらそうて、蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓・金殿の昔の榮華、船中浪底の今のありさま、思ひならべてあはれなり。
(源平盛衰記)

一五 討入の光景を報ず 榎本 其角

歳尾

元祿十五年。
(二五三)

都文公
本所松坂町な
る吉良家の隣
に住める土屋
主税。

歳尾の御壽として例年の如く遠路の處酒料一封露の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へも宜しく御傳へ下さるべく候。然れば去る十四日本所都文公*に於て年忘れの一興御催しあり、嵐雪杉風*われらも一席にて、折から雪面白く降出し風情手

嵐雪・杉風
服部嵐雪・杉
山杉風二人と
も芭蕉の門
人。

に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照し、風興今は捨て難くして、夜ただ更けゆき、最早丑三つ頃になり、犬さへ吼えず打靜まり、文臺料紙も押片寄せ、四五人集りて蒲團を被ぎ、夢の憂世といふ間もあらせず、劇しく門を叩く者兩人玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衛・大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へ押寄せ、亡君年來の遺恨を果さむため、大石内藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討取り候間御鄰家の御好み、武士のなさけ、萬一御加勢も候はゞ末代の御不覺と存奉候。願はくは門戸を嚴しく御防ぎ火の元御用心下され候はゞ忝く存奉候とて、いひも果さず立出づるその風情、神妙なる事いふべくも非ず、今は俳友もこれ

までなりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名残を見むとて門前に走り出づれば、各、吉良家に忍び入り候程に、

わが雪と思へば、かろし笠の上

と高々と一聲呼ばはり、門を閉ぢて内を守り、塀越しに提燈



其角筆蹟

ともし始終を伺ふに、その寒さ骨身に染み、女人の叫び童子の泣き聲、風飄々と吹誘うて、曉天に至りては本懐已に達したりとて、大石主税・大高源五、物穩便に謝儀を述べたること、あつばれ武士の譽れといふべし。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源吾が精神、未だ眼前にのこり候。貴公年來の御入魂ゆゑ具に認め進じ申候。早春の内かれこれ御さしくり御出府候は、かの落著も承り届け、餘儀なく伏劔に及び候は、竊かに追善をも相營み申すべく存候。先は餘日もこれなく書外貴面の時を期し候。恐々謹言

十二月二十日

其角

文* 璘 様

月雪の中や命の捨てどころ

文璘
姓は梅津、名は半左衛門といふ。秋田藩士にして俳人なり。

一六 折節のうつりかはり 吉田 兼好

一六 折節のうつりかはり

物のあはれは云々
春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる(讀人知らず、拾遺集)

花橘は云々
五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする(讀人知らず、古今集)

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草もえ出づる頃より、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやうくけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古の事も、たちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

人の戀しさも云々
わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞこひしかりける(凡河内躬恒、古今集)

灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも、人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やうく夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白うおけるあした、遣水

御佛名
十二月十九日
より三日開佛
名を稱ふる公
事。

荷前の使

年の末に十陵
八墓へ幣帛を
奉らせらるゝ
勅使。

追儼

十二月晦の夜
に悪鬼を追ひ
遣る公事。

四方拜

元旦寅の時に
天皇四方及び
山陵を拜し給
ひて、災を祓
ひ寶祚を祈ら

せらるゝ儀
式。

大塔宮二品
親王

後醍醐天皇の
第三皇子護良
親王。延暦寺
の大塔に居給
ひし故に大塔
宮といふ。

南都

奈良。

般若寺

奈良市の端な
る奈良坂の南
にあり。

主上

後醍醐天皇。

より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはて、人ごとに
いそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじき物にし
て、見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ
心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにや
んごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて、
もよほし行はるゝさまぞいみじきや。

追儼より、四方拜につゞくこそおもしろけれ、つごもりの夜、
いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人のかどた
たき、走りありきて、何事にかあらむ、ことごとくしくのゝしり
て、足を空にまどふが、暁がたより、さすがに音なくなりぬる
こそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭る

わざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、なほする事に
てありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけし
き、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心
地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげ
なるこそ、またあはれなれ。(徒然草)

一七 熊野落

*大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞き召されむ爲に暫
く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落
ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む
恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隠さるべ

一乘院
奈良興福寺内
に在りし一

き所なく、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちし
て、晝は野原の草に隠れて露に臥す鶉の牀に御涙を争ひ、夜
は孤村の辻に佇みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、
いづくとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫
しはとおぼしめされける所に、一乘院一の候人按察アキサツ法眼ホウガン好專
如何して聞きたりけむ、五百騎を率ゐて未明に般若寺へぞ
寄せたりける。

折節宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎ
て落ちさせたまふべき様もなかりける上、透間もなく兵已
に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべきかたもなし。
「さらばよし、自害せむ」とおぼしめして、既におしはだ脱がせ

たまひたりけるが、事叶はざらむ期に臨んで腹を切らむ事
はいと易かるべし。若しや」と、隠れて見ばや」とおぼしめし
返して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大
般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの
櫃は御經を半ばすぎ取出して蓋をもせざりけり。此の蓋
を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させたまひ、其の上に
御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおは
しける。若し捜し出されなば、やがて突立てむと思召して、
氷の如くなる刃を抜いて御腹にさし當て、兵こゝにこそ」と
いはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るも尙
淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも
 残る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、これ體の物こそ
 怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃
 二つを開けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせ
 ず。「蓋開けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中をいで
 去りぬ。宮は不思議の御命を續かせ給ひ、夢に道行くこゝ
 ちして櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り委しく搜
 す事もやあらむと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見た
 りつる櫃に入りかはらせたまひてぞおはしける。
 案の如く兵ども、また佛殿に立歸り、前の蓋の開きたるを見
 ざりつるが覺束なし。」とて、御經を皆打移して見けるが、から

摩利支天

印度神話中に
見る火星の
神。俗に軍神
とし隠形の神
とす。

十六善神

佛法守護の
神。

熊野

今の紀伊の牟
婁郡の地。

からと打笑うて、大般若の櫃の中をよくくく搜したれば、大
 塔宮はいらせ給はで大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戯
 れければ、兵皆一同に笑ひて門へぞ出でにける。「これ偏に
 摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり。」と信心
 肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。
 かくて南都邊の御隠れがも叶ひ難ければ、即ち般若寺を御
 出あつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には
 光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模岡本、三河坊武藏坊村上
 彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼是以上九人なり。宮
 を始め奉つて御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉
 半ばにせめ、その中に年長せるを先達に作り立て、田舎山伏

の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮・脚半・草鞋をめて少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も見尤むることなかりけり。

由良
紀伊國日高郡
に在り。
藤代

*由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤

同國海草郡に在り。今は名高浦と合せて内海村と云ふ。

和歌

同國同郡和歌の浦。雜賀崎より毛見崎まで和歌村、紀三井村の江灣をいふ。

吹上

同國同郡。和歌山市の西南部より雜賀村に至るまでの古名。

玉津島

同國同郡、和歌村の南なる妹背山の古名、其の海岸に玉津島神社あり。

切目

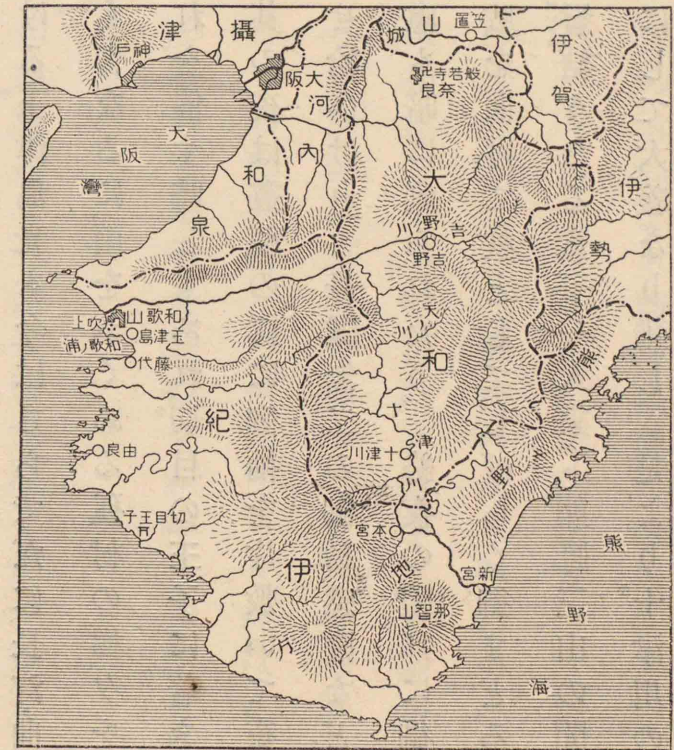
紀伊日高郡に在り。

代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て月にみかける玉津島光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、しばらく御まどろみありける御夢に、鬢結うたる童子一人來て、熊野三山の間は尙も人の心不和にして大義なり難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて時の至らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附

熊野三山
本宮・新宮・那智の三所をいふ。
十津川
大和吉野郡。

け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽



ける。

ぜられて、御夢はす
なはち覺めにけり。
これ權現の御告な
りけりとたのもし
くおほしめされけ
れば、未明に御よろ
こびの奉幣を捧げ、
やがて十津川を尋
ねて分入らせ給ひ

其の道のほど三十里が間には絶えて人里もなかりければ、
或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る
水に渴を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨
なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劔に
削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる
嶮難を経させたまへば、御身も草臥れ果て、流る、汗水の
如く、御足缺け損じて草鞋皆血に染まれり。御供の人々も
其の身鐵石にあらざれば、皆々うゑ疲れてはかゝしくも
歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十
三日に十津川へぞ著かせ給ひける。(太平記)

一八 寛成親王鷹狩の事

寛成 後村上天皇の皇太子にして、即位して長慶天皇といふ。
なつみ川 大和國吉野郡國樸村宇菜摘の附近にて吉野川を呼ぶ。

實爲 姓は藤原。後村上天皇に仕へ大納言に任ぜらる。

寛成の親王の未だをさなうおはしける時に、若き殿上人あまた伴なはせ給ひて、なつみの川の川淀の邊りにて鷹つかはせて御覽ありけるに、いと大きな岩のえもいはずおもしろきに、小松の生ひいでたるありけり。親王御覽じさせ、この岩を、歸りなむ時皇居の御庭にもてまゐれ。上に奉らむ。と實爲の中將に宣はせければ、幼き御心を推しはかりて御こと受けさせ給ふ。
鳥などあまた取らせ給ひて、歸らせ給へる時に、忠行の侍從に「岩をな忘れ給ひそ。」と宣はせければ、民部大輔が力も強く侍れば、御あとより持て參り侍ふなり。」と啓して、皇居に入ら

せたまふ。御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲の中將に「ありつる岩を。」と召させ給ひけるに、「忠行の侍從の仰せごとを承りぬ。」と啓し給へば、侍從を召して、「如何に。」と尋ねさせけるに、また「民部大輔の御あとより。」など申し給へば、親王むづからせ給ひて、「中將にこそよく言ひつれ。などさはいふにか。」と責らせたまひければ、中將のありつる事を上に奏し給ふに、をかしがらせ給ひて、「誠に面白からむ岩こそ見まくほしけれ。民部が力こそゆゝしければ、持て來なむに、召させ給へ。」と宣はするに、中將立ちたまひて、民部大輔に、「かゝる事なむある。如何してむ。」との給へば、「すべき事こそあるなれ。」とて御庭にありける小さき岩に松の枝を取りつけて、中將とい

と重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉れば、小さくこそあれ。それにはあらじ。」と、なほむづからせ給ひければ、民部大輔、さればこそ、其の岩を持ちて上の山を通り候ひしに、左右より山のさし出で、道のいと狭き處にて、かなひ難く、如何にせましとたゞよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來りけるが、『岩にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ。』とのゝしりける程に、『我もせん方なさにかくて侍り。如何にせまし。』とわびあへるに、『さらばすべき事こそあれ。』とて、數珠をおしもみ、何やらむつぶやきて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすやすと通りて候ひし程に、山伏も行過ぎしを、呼返して、『本の如く祈りなほしてよ。』と云ひければ、『また行くさきに細き道

のあらばいかゞし給はむ。』と云ひし程に、實にもと思ひ侍りて、其のまゝ持て參りぬ。と申し給へば、上より始めて有りつる人々をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、『げにさもあらむことなり。その山伏召し返せかし。』とのたまはするに、『はや遙かに行き過ぎて、いづち行きけむも知らず。』と啓し給へば、『本意なきことにこそあれ。留めて、民部大輔の大きなるそら言をすこしきやうに祈らせむものを。』と宣はせけり。誠に行末たのもしき御事にこそといとせめて覺え侍りし。 (吉野拾遺)

一九 新葉和歌集

元弘
元弘元年（一九
一）後醍醐天皇
笠置山に行
幸。
弘和元年
（二〇〇）後龜山
天皇即位の十
三年。

後醍醐天皇の皇子、宗良親王、歌に堪能なり。將軍として外に戦ふ際にも、吟詠を廢し給はず。元弘以來、弘和元年までの名歌を撰びて新葉和歌集と題しけるに、後龜山天皇之を勅撰に準じ給へり。新葉集は斯かる次第にて出來たれば、從つて吉野山に關する、哀なる歌も少からざるなり。

こゝにても雲井の櫻さきにけり

唯かりそめの宿とおもへど

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に雲井の櫻と稱する一株あり。雲井は禁中をいふ。さらでだに、舊禁中の戀しくして堪へ給はざるに、吉野山中、雲井と稱する櫻を御覽じては、豈、叡感無量ならざるを得むや。悲しいかな、假

延元陵

後醍醐天皇の御陵にして吉野山中、塔尾にあり。天皇の崩御が延元四年なりしを以て延元陵と稱し奉る。
中院入道
北畠親房。

業平朝臣に云々

在原業平都鳥を見て、名にしおはばいざこととはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと」と詠みし事は伊勢物語に出づ。

そめの御宿、つひの御宿となりて、延元陵畔長へに遊子をして涙に襟を沾さしむ。中院入道は、同じ雲井の櫻を詠じて、

吉野山雲井の櫻君が代に

逢ふべき春や契りおきけむ

隅田川に浮べる都鳥も、都といふことを名に負ふが爲に、業平朝臣に都の事を問はれしが、今は其の名の如く、江戸の地が都となりぬ。吉野の雲井の櫻も吉野の地に雲井が出來て、名實相應ずるやうになりたり。花の仕合は即ち南朝の君臣の不仕合、造化の配劑亦奇なるかな。

吉野山花も時得て咲きにけり

都のつとに今やかざむ

京都に還らせ給ひし時の云々
正平十六年(三〇〇)十二月、一度京師を復し給ひしが遂に保つ能はず、翌年一月再び吉野に遷幸せらる。

これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがて又京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に遷らせ給ひし時の御失望や如何なりけむ。

我が宿と頼まずながら吉野山

花になれぬる春もいくとせ

嘉喜門院

これ後龜山天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひ、父祖の御遺志を嗣ぎ給はむの御志切なれども、南風競はず、終に神器を後小松天皇に授け給へり。されど知らず、京都は果して御心に叶ひたる御宿なりしや。この天皇の御母を嘉喜門院と申しま

後村上天皇の女御。姓氏詳ならず。

つる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習ひこそ

我が身の春のものおもひなれ

昨日は紅顔、今日は白頭、人生の老い易きは、男子とても悲歎に堪へざるに、況して女性の御身、櫻花の散易きさまを見給ひて、いかに御身を果敢なくおぼし給ひけむ。

故里は戀しくとても三吉野の

花の盛りをいかゞ見すてむ

これ「新葉集」の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど、花散らば、又いかに都の戀しかるらむ。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給

へり。されど後村上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を弾き給はざりき。然るに、天授三年七月七日、吉野の行宮にて、樂を張り給ひけるが、樂終りて後、後龜山天皇、門院に向ひて一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、一曲を奏で給ふ。其の時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの

あきおもほゆるみねのまつかぜ

昔は、父天皇この琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけむ。父天皇今はおはさず、母君の琵琶が、亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや

吹きたえぬべき峯のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし、君が昔を忍ぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして詞も妙なり。宗良親王之を評して、古の勅撰集中の唱和に比して毫も遜色なし。と、これを新葉集に収めたまへり。（天町桂月「作文五十講」による）

二〇 鉢木その一

ワキ次第「ゆくへさだめぬ道なれば、來し方も何處ならまし。詞「是は一處不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此の度は鎌倉に上り、春

信濃なる云

信濃なる淺間の嶽に立つ煙をちかた人の見やはとがめぬ(業平)

大井山

信濃佐久郡大井庄なる山。

友の里

同郡伴野庄。

離れ坂

同郡離山の事、輕井澤と杳掛との間に在り。

碓氷川

上野碓氷郡、碓氷山中の衆水集りて横川驛の邊にて此の名あり。

板鼻

同郡に在る町。

佐野

になり修行に出でばやと思ひ候。「道行」信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに著きにけり。「ワキ」詞、急ぎ候ほどに、上野國佐野の渡りに著きて候。あら笑止や又雪の降り來りて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。いかに此の屋の内に案内申し候。「ツ」誰にてわたり候ぞ。「ワキ」これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。「ツ」易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。「ワキ」さらば御歸りまて是に待申さうずるにて候。「ツ」それはともかくもにて候。我は外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。「ツ」あ

上野群馬郡に在る村。

雪は云々

雪似鵝毛飛散亂、人被鶴氈立徘徊

(白樂天)

今日の寒さ云々

狭布の里に掛けて用ふ。狭布は陸奥にある細布の産地にて古歌に詠まる。

あ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らむ。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氈を著て立つて徘徊すといへり。されば今ふる雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴氈を著て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の今日の寒さを如何にせむ。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや、この大雪に何とて是にたゞみて御入り候ぞ。「ツ」さん候、修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、是まで参りて候。「ツ」扱その修行者はいづくに渡り候ぞ。「ツ」あれに御入り候。「ワキ」我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候程に、一夜の宿を御かし候へ。「ツ」やすき御事に

山本の里
上野群馬郡八幡村大字根小屋の舊名。

て候へども、餘りに見苦しく候程に、御宿は叶ひ候まじ。『ワキ
「いや〜見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を
御かし候へ。』シテ留め申したくは候へども、我等夫婦さへ住
みかねたる體にて候程に、中々御宿は思ひもよらぬ事にて
候。是より十八町ばかりあなたに、山本の里とてよき泊の
候。日も暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。『ワキ、扱は
しかと御貸しあるまじにて候か。』シテ御いたはしくは存
じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。『ワキ、あら曲もなや、よ
しなき人を待申して候ものかな。』ッレ淺ましや我等かやう
に衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人
に値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべく

駒とめての
歌

此の歌は新古今集に載せられたる定家の作。
三輪が崎
紀伊東牟婁郡の海邊にある村。此の西南に接して今大字佐野の名残る。

は御宿を參らせ給ひ候へ。『シテ左様に思し召し候は、何
とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出
で候まじ。某追付きとめ申し候べし。なう〜旅人御宿
參らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛
はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行
方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給
ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うち拂ふ陰も
なし、佐野の渡りの雪の夕暮。斯様によみしは大和路や三
輪が崎なる佐野の渡り、地是は東路の、佐野の渡りの雪の暮
に、迷ひ疲れ給はむより、見苦しく候へども、一夜は泊り給へ
や。歌げに是も旅の宿、假初ながら値遇の縁、一樹の陰のやど

一樹の陰云々

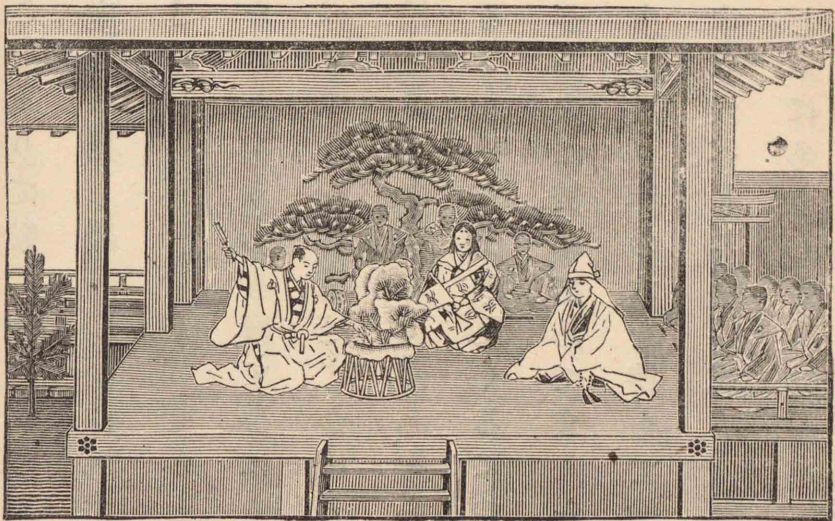
宿二樹下、
汲二河流、一
夜同宿、一日
夫妻、皆是先
生結縁。(説法
明眼論)

りも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木陰、是は雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。
「シテ、いかに申し候。御宿は申して候へども、何にても候へ参らせうざる物もなく候はいかに。」
「ッ、折節これに粟の飯の候程に、苦しからずば参らせられ候へ。」
「シテ、さらば其の由申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へ共、参らせうざる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦しからずば、聞し召され候へ。」
「ッ、夫こそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」
「シテ、なう聞し召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。」
「ッ、心得申し候。」
「シテ、總じてこの粟と申す物は、古へ世にありし時は、歌によみ詩に作りたるを

盧生が云々

支那の傳説に、蜀國の盧生といふ者、邯鄲の里にて粟飯の熟する間一睡したるに其の間に榮花を極めし五十年間の夢を見たりと。

こそ承りて候に、今は此の粟を以て身命を繼ぎ候。げにや
* 盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢の
さめしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれやげに我もまた、暫し
なりともうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もある
べきに、なう御覽ぜよかほどまで。
「地、住みうかれたる故郷の松風さむき夜もすがら、寝られねば夢も見ず、何思ひ出のあ
るべき。」
「シテ、夜の更くるについて次第に寒くなり候。何を
がな火に焚いてあてまゐらせ候べき。や、思ひ出だしたる
事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り火に焚いてあて
申し候べし。」
「ッ、げに、鉢の木の候よ。」
「シテ、さん候それが
し世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひ



しを、斯様の體にまかりなり、
 いや〜木數寄も無用と存
 じ、皆人に參らせて候さりな
 がら、今も梅・櫻・松を持ちて候。
 あの雪もちたる木にて候。

鉢

某が祕藏にて候へども、今夜
 の御もてなしに、之を焚きあ
 て申さうずるにて候。「ツキ、い
 やいや是は思ひもよらぬ事
 にて候。御志はありがたう
 候へども、自然又御事世に出

木

で給はむ時の御慰にて候間、中々思ひもよらず候。「シテ、いや
 ととも此の身は埋木の、花咲く世に逢はむ事、今此の身にて
 はあひがたし。「ツレ、たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くな
 らば。「シテ、これぞまことに難行の、法の薪とおぼしめせ。「ツキ
 「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。「シテ、御出でにより我
 等も火に當りて候。「ツキ、いかに申し候。主の御名字をば何
 と申し候ぞ承りたく候。「シテ、いや某は名字もなき者にて候。「
 ツキ、何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。自然の時の
 爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。「シテ
 「この上は何をかつゝみ候べき。是こそ佐野の源左衛門の
 尉常世がなれる果にて候。「ツキ、其は何とてか様の散々の體

最明寺殿
北條時頼

にはなり給ひて候ぞ。シテ其の事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となり候。ワキなうそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて、其の御沙汰は候はぬぞ。シテ運の盡くる所は最明寺殿さへ修行に御出て候上は候。か様におちぶれては候へども、御覽候へ是に武具一領長刀一えだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、此の具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ著到につき、さて合戦始らば、地敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひ討ちあひて、死なむ此の身の此のまゝならば、いたづらに飢につかれて死なむ命な

只頼め云々
なほ頼めしめ
じが原のさし
も草われ世の
中にあらむ限
りは(新古今
集)

んぼう無念のことさふぞ。ワキよしや身の、かくては果てじ
*只頼め、我世の中にあらむ程、またこそまゐり候はめ。暇申して出づるなり。シテッレ名残惜しの御事や、はじめはつゝむ我が宿のさも見苦しく候へど、しばしは留りたまへや。ワキ「留る名残のまゝならば、さて幾度か雪の日の、シテッレ空さへさむきこの暮に、ワキいづこに宿をかり衣、シテッレ今日ばかりとまりたまへや。ワキなごりは宿にとまれども、暇申して、シテッレ御出か。地さらばよ常世。シテッレまた御入り。地自然鎌倉に御のぼりあらば御尋ねあれ。希有がる法師なり。かひがひしくはなけれども、公方の縁になり申さむ。御沙汰捨てさせたまふなと、いひすて、出船の、ともに名残や惜し

むらむ。

二一 鉢木その二

シテ、いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なにおびたゞしく上る。さぞあるらむ。東八個國の大名、小名、思ひくの鎌倉入り、さぞ見事にて候らむ。白金物打つたる糸毛の具足に、金銀を展べたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬にのり、乗替中間きらびやかに、うちつれくのぼる中に、常世が常にかはりたる馬物具や打物の物、其のものにあらざる氣色、さぞ笑ふらむさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あ

ら道おそや、地、急げども、弱きに弱き柳の糸の、シテ、よれによれたる瘦馬なれば、地、うてどもあふれども、先へ進まぬ足弱車の、乗り力をければ追ひかけたり。

ワキ、いかに誰かある。ッレ、御前に候。ワキ、國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか。ッレ、さん候悉くまゐりて候。ワキ、その諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を著、錆びたる長刀をもち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。

急いでこなたへ來れと申し候へ。ッレ、かしこまつて候。いかに誰かある。狂言、御前に候。ッレ、君よりの御諛には、諸軍勢のなかにちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前

へ參れとの御ことにて候。「狂言畏つて候。いかに申し候。」
「何事に候ぞ。」狂言上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。
「シテ何と某に參れと候や。」狂言中々の事。「シテあら思ひよら
ずや。これは定めて人違にて候べし。」狂言いや〜そなた
の事にて候。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき
武者をつれてまゐれとの上意に候が、見申せば其方ほど見
苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御まゐり候
へ。「シテ何とたとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者
にまゐれと候や。」狂言中々のこと。「シテさては某にて候べし。
畏り候と御申し候へ。」狂言心得申し候。「シテげに〜これも
心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前へめし出ださ

れ頭を刎ねられむためな。よし〜それも力なし。いで
いで御前に參らむと、大床さして見渡せば「地今度の早打に、
上り參れる兵、きら星の如く竝み居たり。さて御前には諸
侍、その外數人竝み居つゝ、目をひき指をさし、笑ひあへるそ
の中に、「シテ横縫のちぎれたる、地古腹卷に錆長刀、やう〜
に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前にかしこま
る。」ワキやあいかにあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か。
是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてある
か。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御
大事あらば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆び
たりともその長刀を持ち、瘦せたりともその馬に乗り、一番

にはせ參ずべきよし申しつる、言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづく今度の勢づかひ全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らむ爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその沙汰いたすべきところなり。まづく沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又なによりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、あはせて三個の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へた

上野や云々
かみつけぬ佐
野の船橋とり
はなし親はさ
くれどわはさ
かれがへ(萬
葉集)

びければ、「シテ」常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、是程の御景色、さぞ羨ましかるらむ。地、さて國々の諸軍勢皆御いとま賜はり、故郷へとぞ歸りける。「シテ」その中に常世は、地、その中に常世は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇めこの馬に打乗りて上野や、佐野の船橋とりはなれし、本領に安堵して歸るぞうれしかりける。」

二二 與謝蕪村

藤岡 作 太郎

蕪村與謝氏、本氏は谷口、名を長庚といひ、後に寅と改む。字は春星、蕪村、三葉堂、夜半亭、碧雲洞、紫狐庵等の號あり。攝津

早野巴人
其角の門人に
して江戸の俳
人なり。一度
京都に出で老
後復江戸に歸
る。夜半亭と
號す。

天明三年
徳川十三代將
軍家治の時
(二四四三)

東成郡毛馬村の人。幼にして母の生家に養はる。其の家
は丹後與謝郡に在り。後與謝氏を名のれるはこれが爲な
り。長じて江戸に赴き、俳諧を早野巴人^{*}に學び、後京都に住

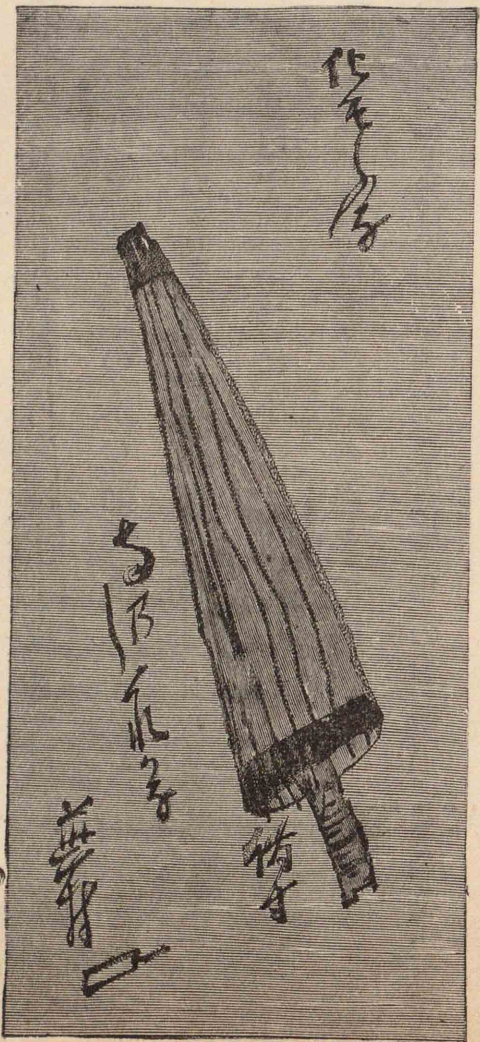


村 蕪 謝 與

みて畫と俳諧とを以て世に
立てり。天明三年^{*}、六十八歳
にして歿す。
蕪村の俳諧に於けるや、世既
に定評あり。今日の俳句を
評する者、多くは此の翁を激賞して措かず。蓋し芭蕉以後
其の道漸く腐敗し來れるを、更に清新なる格調を唱へて、其
の頽勢を挽回せるいはゆる天明の改新は、蕪村を以て其の

功勞者の主位に置くべきなり。句法は畫法と共に粗放奇
拔、

あらむづかしの假名遣やな。字義に害あらずんば、あ



讀 筆 村 蕪 謝 與

まよ。

梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら

と喝破せるは、すなはち其の畫に神韻を本とし、形似を末としたると同一筆法にあらずや。燕村また好んで京畿の名所及び古代の人物・風俗を詠ず。たとへば、

春月や印^{*}金堂の木の閒より

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

春雨や綱^{*}が袂に小でうちん

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

かくの如きは山紫水明、また千年の歴史ある舊都の地に住みたればなるべし。されど其の畫はこれに異なり、古代繪卷物などの影響も、強ひて求むればまた認むるを得べからざるに非ずと雖も、燕村の特色は却つて新に漢畫を興せる

印金堂

山城葛野郡宇多野にありし妙光寺境内の一堂。

綱

姓は渡邊、源頼光の四天王の一人。

狩野・土佐

狩野派は狩野正信の開きしもの、土佐派は藤原基光及び藤原隆能の開きしもの。

宅磨

宅磨榮賀は佛像・人物・畫くの妙手あり。宅磨派を開いて子孫に傳ふ。鎌倉時代末期の人なり。子孫の中に爲氏・爲成等は最も名あり。

にありて、陳腐なる狩野・土佐は捨て、顧みず。されば其の俳諧に屢、漢語を用ひしは正に其の畫法と相應ず。

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

霜百里舟中にわれ月を領す

詩人にして且畫家なるもの、其の所詠の畫趣あるが少からざるは當然の事なり。

柳散り清水涸れ石處々

一行の雁や端山に月を印す

巨利に遊び、名畫に接して古人を追懐し、詩興勃然、發して句を成せりとおぼしきものまた多し。

不動畫がく宅磨^{*}が庭の牡丹かな

雪信

清水雪信は探幽の姪にして女流畫家中古以來第一と稱せらる。此の他同名の畫家二三見ゆ。

相阿彌

畫家にして造庭・詩歌・香茶等に通ず。足利義政に仕ふ。

大文字

毎年八月十六日夜、京都東山如意嶽にて大の字の形に火を焚く行事。

大雅

姓は池野、有名の畫家にして、奇行多し。徳川十代將軍の頃の人。

雪信が蠅うちらはらふ硯かな
相阿彌の宵寢起すや大文字
燕村が畫道の功も敢て俳諧に譲らず。されど生時は畫名いたく著れず。其の聲價は歿後にいたりて高くなりぬ。これ燕村は大雅に比するになほ數年の長にして、其の若く盛なりし頃は未だ文人淡泊の畫を賞する者少かりしと、又主として其の俳名に蔽はれしとに因れるなるべし。其の畫或は彭百川に學べりといへども、燕村みづから稱して、吾に師なし、古今の名書畫を以て師とす。といへり。其の元明諸大家の遺墨を研究して、以て一家を成せる事推して知るべし。

彭百川

彭城眞淵の事。百川は號なり。徳川八代將軍頃の人物。

蕭何云々

蕭何・韓信は共に漢高祖の臣、韓信初め用ひられずして去りしが、蕭何其の才を惜しみ追うて之を連れ歸れり。

玄徳云々

玄徳は蜀漢の帝劉備。始め孔明を用ひんと欲して三度其の草廬を訪ふ。

慈照寺

銀閣寺の事。

燕村の畫がくところ減筆の粗畫多く、又好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫がく。運筆簡にして狂、恰も兒戲の如くにしてしかも興味津々たり。屢題するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は實に此の翁に至りて興りしなり。然れども燕村の作品はただ此の種の粗畫のみにあらず、緻密なる山水等の畫も亦往々にして存す。其の畫を作るや、一室に籠りて人の入るを禁じ、獨坐して思を凝せりといふ。蕭何・韓信を追ひ、玄徳・孔明を訪ふ圖の屏風、野馬圖屏風は其の精細なる筆致を見るべく、慈照寺の襖繪なる水村圖・群仙圖等は其の疎放なる畫趣を察すべし。何れも渠が傑作なり。燕村嘗て讚岐丸龜に遊び、其の地の妙法寺の襖に畫が

寒山拾得
支那唐時代の
隱士寒山子と
若僧拾得との
相携ふる風姿
を畫けるも
の。

田能村竹田
豊後岡の藩醫
の家に生れ、
畫を以て名高
し、徳川末期
の人。

く。世にこれを燕村寺と稱し、寒山拾得・水墨蘇鐵山水等の
大作今なほ存すといふ。
燕村の畫瀟洒にして飄逸、常人の臆測に及び難きこと頗る
大雅と相似たり。二人ともに斯道の天才にして、其の妙趣
は他の企及を許さず。然れども二人に差別すべき所亦多
し。大雅を天上の神とすれば、燕村は下界の仙なるべく、文
人畫家者流は後者を以て俗氣多しとして取らず。田能村
竹田評して、「大雅は正にして譎ならず。春星は譎にして正
ならず」といへり。されどなほ二人を品して、「均しくこれ一
代覇をなす好敵手」と評し、更に燕村を稱して曰く、「用筆傳彩
全然たる明人。布置點景、これを邊邑僻境有るところの寔

景に取る。故に景は新に、法は古く、意を用ふること最も深
し。高名の下虚士なしとは洵に誣ひざるなり」と。泛々た
る世人の褒貶は取るに足らず。名流竹田の品騭は以て燕
村の價を定むべきなり。(日本繪畫史)

二三 今様三首

蓬萊山

よみ人知らず

蓬萊山には千歳ふる

萬歳千秋かさなれり

松の枝には鶴巢くひ

巖のそばには龜あそぶ

(五節開郢曲)

舊き都

藤原 實定

藤原實定
源平時代の公
卿。世に後徳
大寺左大臣と
云ふ。

ふるき都を來て見れば 淺茅が原とぞあれにける
月の光はくまなくて 秋風のみぞ身にはしむ

(源平盛衰記)

鶴 龜

佛 御 前

君を始めて見る時は 千代も經ぬべし姫小松
御前の池の龜岡に 鶴ぞ群れ居て遊ぶなる

(平家物語)

二四 蓋世の雄成吉思汗

歐羅巴の中世史を披いて成吉思汗の偉業を見る者、誰か悵然として卷を掩ひ、當年虎踞龍盤の大版圖、今日擧げて白晳

人種の手に歸するを慨せざるものぞ。

第十三世紀、西歐諸國の侯伯騎士が、方に十字軍前後七回の戦役に困憊し、萬骨空しく^{*}ジュデアの野に枯れ、碧血徒にゼ^{*}ルザレムの聖地を蝕し、而も竟に基督の靈跡をばトルキスタンの手より奪還する能はずして止みたりし時、彼、成吉思汗は東亞細亞大興安嶺の西、ヤブロノイ山脈の南、遊牧の民に崛起し、猛然一擧して中央亞細亞の太平洋を席捲し、再擧してバミール^{*}以西アル海^{*}カスピアン海^{*}の湛ひ、黒海の波うち、コーカサスの脈を横たへ、ウラル^{*}ボルガ^{*}諸江^{*}の流るゝ地を略し、更にヒマラヤ^{*}の聳え、インダス^{*}ユウフラテス^{*}の注ぎ、ペルシヤ^{*}灣^{*}地中海の割する國を降服せしめ、長驅してド

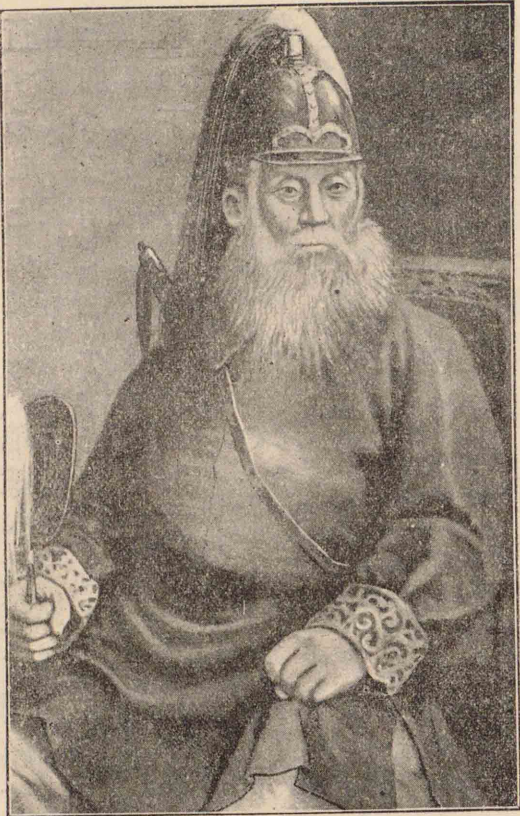
Indus	Caucasus	Jablono	Judaea
Euphrates	Ural	Pamirs	Jerusalem
Persia	Volga	Aral	Turkestan
	Himalaya	Caspian	

Don
Dnieper
Donau
Baltic



ン・ドニエブル兩河の走り、ドナウ河の潤ほす地より、バルチツク海に及べる東歐羅巴の大平原を蹂躪し、白人をして、殺戮時代と呼んで震駭し、其の骨を寒うし、其の心を悸かしめたるに非ずや。地球ありてより以來、英雄の大陸を席捲せし者、それ幾許ぞ。歴史ありてより以來、君主の邦土を削平せし者、亦幾許ぞ。然れども規模の大、版圖の廣、我が成吉思汗の如きは之を前にして其の儔なく、

之を後にして其の倫を絶す。寔に以て上下古今の獨歩とすべし。詩人の形容して拔山蓋世の雄と云ふ者、宇内千古



成吉思汗

の中世の歴史を過去に有する蒙古民族、それ果して永久に白哲人種の下風に俛首すべきか。悠遠なる未來を以て、過

Heroules

去二三世紀に比す、此を以て彼を推すは固より蠡を以て大海を測るに異ならず。太陽がハ^{*}ーキュリーズに向ひて進行すること更に近く、地球が軌道を回轉すること更に幾度を加ふる間に、世界歴史の自ら其の生面を變革するあり、千載の下蒙古民族當年の雄圖が再び史卷を照耀して、白哲人種の感慨に堪へざること、猶蒙古民族の今日に於けるが如きの日なしといふべからず。蒙古民族の一大記念たる成吉思汗の雄圖、豈永く宇宙の間に録して傳へざるべけんや。世人がアレキサンダー以下の徒を知つて、蒙古の古英雄に成吉思汗の如きあるを知らざるは抑、何の迂愚ぞ。成吉思汗は獨り蒙古民族の一大記念たるのみならず亦實に世界

Alexander

古今に匹儔を見ざる蓋世の雄たりしなり。

露西亞近代の名將ミハイル、イグナチエフ將軍は、嘗て蒙古當年の戰術を調査して曰ふ、成吉思汗の戎器兵仗は勁利にして戰鬪に適し、軍團整肅にして隊伍秩序あり、紀律嚴正にして號令明晰に、將帥の運謀亦周緻にして、戰術・戰法共に當時に超軼し、能く兵を編成して之を統率し、乃ち出で、戰へば必ず敵の中堅を擣き、巧に敵の障礙を避けたり。規模淵大にして、睿知神謀あり。戰鬪概ね驍騎を用ひ、其の數幾千萬あり。而も用兵の妙を得たる、之を當今僅かに三四千の兵を馳驟し得るに過ぎざる處に運用するも毫も隘きを感じず。政治亦條理あり、行政の紀綱井然として紊れず。此の

如くにして方千里の平原に流寓牧畜して、定所なき諸部の民族を提げて悉く己の統轄に服せしめ、之を畫一せる制度の下に隸せしめて茲に一大陸軍を編成せり。其の攻むれば必ず陥れ、戦へば必ず捷ち、一鼓して廣大なる邦土を略有せし者、固より他由あるに非ず」と。乃ち成吉思汗戦法論を著せり。

コリーツェン將軍之に序して曰ふ、成吉思汗が一大侵略を逞うせし者、希臘羅馬其の他後代の戦勝者の如く、隊伍整備せる歩兵を用ひしが故に非ず。彼の率ゐしは中央亞細亞遊牧の土民にして、其の兵制極めて異類なるも、編制整然、軍紀森嚴にして、當時歐羅巴亞細亞諸列國の及ぶべからざる

ものありしに由る。又其の内治外交軍政戦略竝に絶倫の智謀ありしに由る。故に人として征服せられざるなく、兵として撃摧せられざるなく、露國の如きも、勢ひ攻略を免れざりき。而して爾後二世紀間、蒙古韃靼人が露國を維繫せし間に、露國は其の軍政戦略の妙訣を彼に資り、其の資り得し軍政戦略は傳へて彼得大帝に及び、彼等の未だ革新振興するに及ばざる以前に於て、卻つて其の軍政戦略を用ひて、一舉して彼等を疆外に驅逐するを得たり」と。

イグナチエフ將軍は更に蒙古民族當年征服の迅速なりしを驚嘆していはく、普く宇内を通覽するに、僅少の年月を以て廣大の疆域を開拓せること、成吉思汗の如きは、未だ嘗て

Greenwich
Constantinople

見ざる所なり。成吉思汗汗位繼承の初、旗籍の戸數、約一萬三千のみなりしが、後其の征服せし民族の數、凡て七百二十部の多きにおよび、其の繼承者の時にいたりては、奄有せしところの全版圖、方に現下の支那全土、印度の北部、朝鮮半島、全中央亞細亞の地、露西亞帝國の大半、及びインドス・ユウフラテス兩河間に横たはる南部亞細亞を包括したり。これら諸國を討伐征服せしは、纔かに六七十年の短日月に過ぎざりき」と。

^{*}グリニツチ東經三十度、乃至百三十度間に横たはれる土地、^{*}コンスタンチノブル附近より朝鮮咸鏡道附近に至るまで、東西一直線に六千英里、即ち我が二千五百里、是、成吉思汗及

Attica

び其の子孫が、僅々六七十年間に削平せし所なりき。而も其の功は盡く之を成吉思汗の創業に歸せざるべからず。誠に彼の如きは千古未だ嘗て見ざる最大蓋世の雄と云ふべし。
(太田三郎「成吉思汗」による)

二五 希臘の文明

厨 川 辰 夫

地中海の浪に洗はれた南歐の美郷、山水明媚なる希臘半島の一角ア^{*}テイカの州に、光芒燦然たる文化の輝きを見たのは、今から云へばもう二千年にも餘る遠いむかしであつた。その豊麗な思想と藝術とが、ながく百代の民衆を動かして、影響感化が遙かに現代にまで及んでゐるといふ事實は、そ

れ自らに於て既に世界文明史上の一大壯觀たるを失はな
いのである。

希臘の文化は忽ち他國に傳はつた、縁もゆかりも無い、否、ど
うかすると敵であつた他の民族をさへ感化した。羅馬人
が先づ之を學んだのは云ふまでもないとして、あの使徒ポ
ーロの如き、基督教思想を提げ來つて希臘人を愚なりと嘲
つた者が、尙且希臘の詩人に學ぶところあつたのは面白い。
爾後この思潮の勢は一張一弛、時に或は隠れ或は現はれて、
複雑多趣なる歐洲人文史の根柢を流れた。羅馬帝國亡ん
て後は、暗黒の中世に隱るゝ事幾百年、この思潮は遂に猛然
として、近世文明の淵源である文藝復興期の伊太利にあら

Paul

Winkelman
Goethe
NietzscheHomer
Pericles

はれたのである。それからまた暫くすたれてゐたのが、十
八世紀になつて^{*}シンケルマンの古代藝術史論となり、轉じ
てまたゲエテにうつされて、殆どすべての十九世紀以後の
文藝に影響した。近代に於ては、ニイチエの思想こそ最も
大膽にまた最も痛快に、この希臘思想を宣傳したものであ
つた。

おのづから山水秀麗の氣にはぐくまれ、また民族固有の富
贍なる想像力に彩どられて、希臘の國土にあの美しい神話
や傳説の出來たのは、今から約三千年前の^{*}ホームアよりも、
なほもつと遠い遠い昔であつた。それが漸く進んで遂に
紀元前五世紀の頃、^{*}ペリクレスの時代に至つて、文物典章の

美は備り、詩文藝術の上にも千古不朽の大作が現れた。そして之が後の所謂希臘思潮の源泉である事は、西洋史を繙いた人の誰しも知る所であらう。

ちやうど日本が印度や支那から儒佛二教の思想を受入れて、之を同化したやうに、この希臘思想をその儘繼承したものは羅馬人であつた。「七丘の都」を中心とした羅馬大帝國の文明は、確かに人類が嘗て建設した最も光榮ある偉業ではあつたが、その根柢をなしてゐたものは、矢張希臘思潮に外ならなかつた。

併し羅馬人は、希臘人のやうな聰明の智力と節制の美德を缺いた。肉の歡樂を求めて飽くことなく、情熱の奔放に任

七丘の都
羅馬市の事。

Latin

Edward Gibbon

せては、遂に頽廢靡爛の極度に達しなれば止まない南歐^{*}ラテン民族の特徴を、彼等は遂に遺憾なく發揮するに至つた。唯さへ現世的・個人的・自然主義的の希臘思想が、この節制なき羅馬人の生活に移された結果として、羅馬帝政の末路は甚だしく荒廢した。文明爛熟期の常として、人は唯樂欲の巷に本能の満足を求め、歡樂の毒酒に酔うて、又他を顧みなかつたのである。後代の史家が呼んで羅匈頽廢期といふ時代は、即ち此の帝政の末年である。英國十八世紀の歴史家エドワード・ギツボンは嘗て羅馬の廢墟を逍遙し、古の帝王が榮華のあとを弔うて懷古の感に堪へず、椽大の筆を揮うて、遂にかの羅馬衰亡論七卷の大著を完成した。異

教文明爛熟の時代は殆ど餘蘊なきまで本書の中に詳述されてある。(文藝思潮論)

大正國語讀本(修正版)卷八終

大正七年十二月十五日	大正七年十二月十日	大正七年九月三十日	大正七年九月廿六日	大正七年九月廿二日	大正五年十二月廿二日
修正再版發行	修正再版發行	修正再版發行	修正再版發行	修正再版發行	訂正發行

大正國語讀本修正版全拾册

卷一・二	各金三拾四錢
卷三・四	各金三拾錢
自卷五至卷十	各金三拾錢

保科孝一
東京市麴町區土手三番町三十六番地

合資會社 育英書院
東京市牛込區白銀町貳拾番地
右代表者

目 黑 甚 七
佐久間 衡 治
東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷會社 英秀舍



印刷者

發行所

東京市牛込區白銀町二十番地
振替口座(東京)七四二番

合資會社 育英書院

發賣所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目 黑 書店

